

はじめに

——サンクチュアリ教会側の主張は、「反対派」と同じ霊的背景をもっている？

今まで本部は、反統一教会活動をしてきたいわゆる「反対牧師」の批判に、長年にわたって対応してきましたが、最近、真のお母様や教会本部を批判する「サンクチュアリ教会」側の主張を見ると、その内容は、反対派が行ってきた批判および言動と不思議なほど類似しており、同じ「霊的背景」を感じるものです。

類似点①「教祖は淫乱である」と主張

反対牧師らは、長年にわたって「文鮮明は血分け」を実践し、六マリヤどころか六十マリヤがいる」などと教祖批判をし、それを真に受けた信者を脱会させてきました。

しかし、真のお父様は、『六マリヤ』だなんだという朴正華の言葉は、すべてうそです」(マルスム選集三〇六―二四一)と語っておられ、六マリヤを否定しておられるのみならず、ご自分の人生を「モデルとしての絶対『性』の完成のための人生」(『平和神経』二五九ページ)であったと回顧しておられます。事実、『六マリヤの悲劇』の著者である朴正華氏は、その後、著書『私は裏切り者』で、『六マリヤの悲劇』の内容はねつ造であり、虚偽であったことを告白し、各地で報告会を行って自らの行動を謝罪しています。

にもかかわらず、サンクチュアリ教会側では、「六マリヤ」が当然あったかのように主張しており、その言動は反対派の批判と通じるものがあります。「六マリヤ」を語る彼らの言説は、お

父様が説かれるみ言や「純潔」の教えから完全に逸脱しています。

類似点②「怨み晴らしを動機としている」と主張

反対牧師らは、真のお父様を批判するとき、「文鮮明は日本に對し怨みを抱いており、それを動機にして日本人に高額献金を要求するなど、怨みを晴らそうとしている」と言って批判してきました。しかし、実際のお父様は、日本の国の将来を考え、その繁栄を願ってこられたのであって、反対派の批判は全く的外れなものです。

最近、サンクチュアリ教会側が行う真のお母様批判は、「お母様はお父様に対して怨みをもっており、その怨みを晴らそうとしている」かのように主張しており、反対派の手法と似たものを感じます。

しかし、実際のお母様のお姿は、すべてのものを愛し、許され、怨讐をも包み込むものです。その事実について真のお父様は、「お母様はりっぱな女です。……お母様として自分の責任分担をすべて果たしたのです。それがありがたいのです」(『ファミリー』二〇〇六年九月号、三一ページ)と語っておられ、お母様が常に「怨讐関係」の立場にあるような人をも愛され、生活してこられたことを証しておられます。

類似点③「み言と矛盾する内容を語っている」と主張

二千年前、ユダヤ教指導者らがイエス様やその弟子たちを批判するとき、「聖書(旧約聖書)の律法と矛盾したことを教えている」、「聖書からの聖句の引用が間違っている」等々と批判してきました。

現代においても、反対牧師らは、「統一教会(現、家庭連合)は聖書(新約聖書)の福音と矛盾したことを教えている」、「聖

句の引用が間違っている」等々、同様の批判を展開して、信者を脱会説得してきました。

最近、サンクチュアリ教会側が行っている批判も、「お母様や家庭連合本部は、お父様のみ言と食い違^{ごしは}うことを教えており、八大教材・教本『天聖經』（成約聖書）さえも廃棄し、それらの教えと異なる道を行っている」と事実を反することを述べるなどし、「家庭連合から早く脱会するように」と勧めています。このような言動は、反対派が行ってきた脱会説得の手法を彷彿させるものです。しかし、本論の内容を読んでみれば分かるように、彼らの批判は、全く的外れです。

類似点④「教会の幹部は腐敗・墮落している」と主張

反対派は、「統一教会の幹部は公金横領をし、自己保身するいかげわしい人物が多い」と言って批判してきました。その批判を真に受けて脱会し、本部に「脱会届け」を郵送してきた元信者も多くいました。

最近のサンクチュアリ教会側が行っている家庭連合本部への批判は、驚くほどこの反対派の手法と似たものを感じさせます。

最近では拉致監禁を伴った脱会説得事件がめっきり減ってしまい、効果的に「天の摂理」を妨害できなくなった反対牧師の背後にいた「霊的背景」が、今や「サンクチュアリ教会」側の人々を使って、少しでも天の摂理を遅らせようと画策しているかのようです。

これまで反対派は、前述したような批判内容を「拉致監禁」という特殊な環境下で信者に無理やり聞かせ、脱会させてきました。それらと同じ内容、同様の手法が、真の子女様という内部の装いをもって今、私たちに忍び寄ってきているのです。それ

ゆえ、「防衛しよう」とする内的姿勢もない状態の中、「拉致監禁」による脱会説得法と同じか、あるいはそれ以上の効果をもたらし、信者を脱会させているのです。

真のお父様は、「真の父母というの是一組しかいないのです。人類の一組しかいない父母だということです。歴史に初めて登場した、空前絶後の真の父母が顕現した時代が成約時代だということです」（八大教材・教本『天聖經』二四〇〇ページ）と語っておられます。

このように、「空前絶後」の真の父母様、すなわち「文鮮明・韓鶴子ご夫妻」こそが、唯一の「真の父母」であり、唯一の救い主です。その唯一の「真の父母」から引き離そうというサンクチュアリ教会側の巧妙な手法は、サタンの手法そのものです。

今や、「真の父母というの是一組しかいないのです」と語られた真のお父様のみ言に反して、彼らは、子女様を「第二の真の父母」に担ぎ上げようとしているため、このまま行けば、「偽キリスト」「偽りの父母」となり、統一原理の教え、真の父母様のみ言の真髄である「真の父母」を破壊しかねないと危惧するものです。

このような非原理集団「サンクチュアリ教会」等の言動に惑わされ、「空前絶後」の真の父母様である「文鮮明・韓鶴子ご夫妻」のもとを離れないよう、私たちは十分に気をつけなければなりません。天一国の「絶対中心」は天の父母様と真の父母様です。そして、天の父母様、真のお父様の願いは、統一原理、真の父母様のみ言を正しく理解し、「真の父母」が顕現されたことを七十四億人類に知らせ、真のお母様を中心に「教えの正道」を歩むことなのです。

目次

はじめに／1

二、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り／4

- (19) 文亨進様は、真の父母様から「王権」を継承されていない——文亨進様は真の子女の立場を代表して式典に同参しておられたにすぎない／4
- (20) 「天一国四大聖物は、偽物」であり、その聖酒を飲むことは「墮落行為」である」という批判に対する応答／8
- (21) 真のお母様も「メシヤ」である——第二弾／11
- (22) お父様と共にお母様も「神様の立場」に立っておられる／12
- (23) 「二〇一二年八月三日の最後の訓読会で、お父様は『すべてを壊したオンマ（お母様）と金孝律（キムヒョヨル）は責任を取りなさい』と語られた」という批判への応答／14
- (24) 「アベル女性UN創設大会」に関するお母様批判への応答——叱責の言葉は、お母様に対して向けられたものではない／15
- (25) 「アベル女性UN創設大会」のお父様の「神観」に関する重要な名言——「母のいない父」を神様だといって争う愚かさについて／18
- (26) 分派のみ言改竄に要注意／19
- (27) 人間始祖である「真の父母」に後継者は存在しない／23
- (28) 二〇一二年一月十九日の「宣布式」の真相——子女様と祝福家庭の不足をとりなしされるお母様／27
- (29) アブラハム、イサク、ヤコブの論理の悪用について——再臨主に、次の代への延長摂理はない／31
- (30) 「第二代王」を名乗ることは、「万王の王」に対する逆行行為／34
- (31) 「お母様は肉体的墮落をした」という批判への応答／34
- (32) 「お母様が、お父様の生命維持装置を外して『安楽死』させようとした」という批判への応答／35
- (33) 天一国の永遠の中心は、天の父母様と真の父母様である——「真の父」と共に「真の母」を重んじなければならない／39

二、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り

二〇一五年七月二十八日付で、日本統一教会（現、家庭連合）元会長の江利川安榮氏が「退会届」を郵送してきました。そこには、文亨進様を中心とした米国のサンクチュアリ教会の下で、日本サンクチュアリ協会総会長兼協会長として出発するとありました。

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。これらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。すでにNo.1の小冊子で、サンクチュアリ教会側の十八項目にわたる批判に対して応答しましたが、引き続き、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、誌面の都合上、文字数の制限があるために、より詳しくは「真の父母様宣布文サイト (<http://trueparents.jp/>)」をご覧ください。

（教会成長研究院）

注本文中、真の父母様のみ言および「原理講論」の引用などは、網掛けの文字で区別しています。

(19) 文亨進様は、真の父母様から「王権」を継承されていない——文亨進様は真の子女の立場を代表して式典に同参しておられたにすぎない（注…これは30の内容にも関連しています。）

①「万王の王神様解放圏戴冠式」は、亨進様の王権継承の儀式ではない

サンクチュアリ教会側の人々は、「文亨進様家庭は、真の父母様の『王権』を継承されたのだ」と主張します。

彼らが「王権の継承」の根拠としてい

るのが二〇〇九年一月十五日に韓国、同年一月三十一日に韓国と米国の、計三度にわたって行われた「万王の王神様解放圏戴冠式」【写真1】であり、「その時王権が継承された」と主張します。しかし、この式典はその名称が示すとおり、神様と真の父母様が一心、一体、一念、一核となつて「万王の王」として戴冠された式典であり、亨進様が「王権」を継承した式典ではありません。

亨進様が真の父母様から「王権」を継承して「王様」になったという話は、今



写真1

までに聞いたことがありませんし、その事実もないのです。

この式典は、神様と完全一体となられた真の父母様が、神様を王様として戴冠させてさしあげた式です。

そして、王権を確立された真の父母様を中心とする「真の家庭」の四位基台の立場において、亨進様が一緒に立つてその恩恵にあずかり、真の子女の立場を代表して式典に同参したにすぎません。この式典は、あくまでも万王の王としての神様の「解放圏戴冠式」だったのであり、その主役は神様と真の父母様です。決して「王様」の立場が、子女様の代に委譲、継承されたということではありません。

式典の「式次第」「司会者の言葉」および真のお父様の「み言」を調べると、一言たりとも、「亨進様に『王権』を継承します」という文言は語られていません。この時の式典の「司会者の言葉」「式次第」「み言」の全ては、事前にお父様が一言一句チェックされ、司会者に対しても「そのごとく語るように」と指導し

ておられたのです。

この式典で、真のお父様は次のように語っておられます。

「貴賓の皆様！ きょう、皆様は、真に貴い天福を受けられました。万王の王が経綸する摂理的歴史の出征式に参加していらつしやいます。歴史的な大転換期の渦を直接目撃していらつしやいます。縦的万王の王であられる神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真の父母様の戴冠式に招待されました。これ以上に貴く、歴史的な瞬間が、またいつ訪れるでしょうか」（「ファミリー」二〇〇九年三月号、七ページ）

真のお父様は、万王の王神様解放圏戴冠式が「縦的万王の王であられる神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真の父母様の戴冠式」であると語っておられます。この式典は「神様」およびその実体の立場に立っておられる「真の父母様」の戴冠式だったことを知らなければなりません。お父様が式典の意義を明確に語っておられるにもかかわらず、この式典に対し、真の子女様が「王権を継承」した式典であると述べることは、事実をねじ曲げることであり、完全

な誤りです。

写真を見れば分かるように、亨進様ご夫妻がかぶられた冠は、せいぜいプリンス（王子）がかぶる「コロネット」、プリンセス（王女）がかぶる「ティアラ」程度のものだったのであり、万王の王としての「王様」がかぶる冠とは言い難いものです。

ところで、「式典の途中、お父様が『祝祷』された部分こそ王権の継承であつた」と主張する人もいます。しかし、それも誤りです。それが誤りであるのは、式典の司会者の言葉を含め、前後の一連の内容を吟味することにより明白になります。「祝祷」前後の内容は次のようになっています。（以下、式典映像のディクテーション）

【司会者の言葉】

神様の実体として立ち、万王の王戴冠式をなされるために、（真の父母様が）今入場していらつしやいます。そのあとには、真の子女を代表して世界平和統一家庭連合、文亨進世界会長ご夫妻が入場していらつしやいます。そして、そのあとに十人のお孫様が続き、三代圏が一つになって入場していらつしやいます。人類歴史に新しい始まりを告げる驚くべき

この時において、万王の王神様解放圏戴冠式のために入場していらつしやいます。

（真の父母様）ご夫妻が天のお父様に心からの礼を表していらつしやいます。熱い歓声と拍手で歓迎いたしましょう。

「真の父母様が神様に礼を捧げる」ご夫妻が天のお父様に心からの礼を表していらつしやいます。

「真の父母様が玉座に座られたあと、亨進様ご夫妻がその前にひざまずいて敬礼を捧げる」文亨進世界会長ご夫妻が天のお父様と天地人真の父母様に敬礼をお捧げしています。

「真の父母様が『平和神経』を下賜」

平和の王天地人真の父母様が、全人類を代表する文亨進世界会長ご夫妻に『平和神経』を下賜されます。続けて祝祷をしてください。

【真の父母様の祝祷】

「宇宙天地父母様安息圏安着即位式において、真の父母様の祝福を伝授いたします。アーデュ」

【司会者の言葉】

次は御宝と指揮棒を（真の父母様に）奉呈する時間となります。

「真の父母様に指揮棒を奉呈」私たちが代表して天総官文興進様家庭の長男、

文信哲様が指揮棒を真の父母様に奉呈しています。(ディクテーション終わり)

一連の式典の流れで分かるように、真の父母様が全人類に『平和神経』を下賜される時、その全人類を代表する立場で亨進様ご夫妻が『平和神経』を受け取られ、「祝祷」を受けておられるのです。

これは、あくまでも人類に対し真の父母様が『平和神経』を伝授される時の、そのための「祝祷」であり、決して亨進様ご夫妻が「王権」を継承して王様になったものではありません。事実、祝祷の言葉も「祝福を伝授いたします」というものであり、決して「王権を伝授いたします」といった内容ではありませんでした。

ちなみに、「天一国」の名称を正式に言えば「天宙平和統一国」ですが、これは霊界と地上界を合わせた「天宙」の平和統一国であり、その中心は永遠に万王の王であられる神様と真の父母様です。真のお父様と真のお母様が霊界に行かれたあとも、天一国の中心は永遠に神様と真の父母様であり、その点については、かつて亨進様も「真の父母様は永遠に一組です。子女は子女であって、真の父母になることはできません」と語っておられました。

また、「万王の王神様解放圏戴冠式」が挙行された同年の十一月十四日、亨進様は真のお父様から「このメッセージをみんなの前で語りなさい」と命じられ、次のように語っておられます。

「私(亨進)が、真の父母様を否定したり、真の父母様に従わなければ、統一教会人たちは、私に従ってはいけません」

真の父母様と言うとき、それは真のお父様だけでなく、そこに真のお母様が含まれます。したがって、今現在、お母様を否定し従おうとされない亨進様に「統一教会人たちは従ってはいけない」というのがお父様のみ意です。

「万王の王神様解放圏戴冠式」が挙行された年に、真のお父様が亨進様に対し「このように語りなさい」と命じられた事実を考えると、亨進様が現在のようになられる可能性があることを、その時お父様は予見しておられたのではないかと思われます。

②「新しい王に従わないと地獄へ行く」という言説の誤り

前項で述べたとおり、文亨進様は、真の父母様から「王権」を継承された事実はありません。したがって、亨進様は「新しい王」になられたわけではありません。

ところが、サンクチュアリ教会側の人は、「亨進様は王権を相続したのであるから、その新しい王に従わないと地獄へ行くことになる」と語り、教会員たちを脅し、困惑させています。

天一国の永遠の中心は、神様と真の父母様です。その中心は、万人を導いて救われることに目的を持っておられる方であり、人々を裁き、地獄に落とすことが目的の方ではありません。したがって、「新しい王に従わないと地獄に落ちる」と脅し、困惑させるのはとんでもないことであり、全人類を考えながら万人救済を目指しておられる真の父母様の精神に反するものです。

ところで、サンクチュアリ教会側の人で、「亨進様夫妻に、王権を國進様が伝授したのだ」と主張する人がいます。果たして、同じ子女である國進様が亨進様に対して王権を伝授するということが、原理的にありうることでしょうか。

『原理講論』に記されているように、復帰摂理におけるカインとアベルは、あくまでもアダムを善悪に分立した立場であり、アベルは「アダムの代身者」にすぎません。それゆえ『原理講論』は、「彼ら(カインとアベル)が『墮落性を脱ぐ

ための蕩滅条件^{とうげん}」を立ててサタンを分立したならば、その父母であるアダムはサタンを分立した立場に立つことができるので、その子女たち（カイン・アベル）よりも先に『実体基台』の上に立つようにな（る）」（三〇〇ページ）と説明しています。

復帰摂理におけるカインとアベルは、蕩滅復帰のためのアダムの代身として立っている立場です。アダムの代身として立ったアベルを中心に、カインが屈伏して一体化してこそ蕩滅条件となりうるのです。したがって、父母の代身として立つてもないアベルとカインがどんなに一つになっても、それは摂理的に意味がありません。

今や人間始祖の立場であられる「真の父母」が立たれた時代圏において、真の父母様は復帰摂理を勝利され、創造本然の世界の「定点」に立っておられる方です。真のお父様は、真の父母が現れるときが歴史上の「定点」をなす時である、次のように語っておられます。

「人類の真の父母が現れることが歴史の願いであり……摂理の願いです。ですから、そのような真の父母が現れるときは、歴史上で一度しかない定点をなす時

であり、空前絶後の時なのです」（八大教材・教本『天聖經』二〇〇三ページ）

このように、歴史上でたった一度しかない真の父母様が現れる時こそが「定点」をなす時であり、永遠の歴史の中心であることを忘れてはいけません。

したがって、真の父母様が立たれた状況下においては、真の子女様におけるカイン・アベルとは、復帰していく立場ではなく、どこまでも真の父母様の勝利圏を相続していく立場にあります。それゆえ、もし「王権の伝授」があるとしても、それはどこまでも**神様と真の父母様から与えられなければならない**ものです。

事実、復帰摂理におけるカインとアベルの一体化は「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」とはなりえても、「王権の伝授」にはなりえません。それは、せいぜい「長子権」復帰にすぎません。そしてまた、カイン・アベルの真の一体化のためには、真のお父様のみ言によれば、そこに「母子協助」が必要不可欠です。今や、父母様と一体化できず、母子協助すら受けられない立場におられる子女様です。どのようにして「母子協助」があったのでしょうか。

真のお父様は、二〇〇八年四月六日の

第四十九回「真の父母の日」（ハワイでの式典）のみ言で、子女様たちをお父様の前に立たせて、次のように語っておられます。

「あなたたちカインとアベルが、**お母様の言葉に絶対服従**しなければなりません。……あなたたち兄弟同士で争って分かれることはできません。それが父母を殺した元凶です」（「ファミリ」二〇〇八年六月号、三〇ページ）

この真のお父様のみ言に従って、「お母様の言葉に絶対服従」しておられる真の子女様はどなたなのでしょう？ たとえ子女様同士で一つになったとしても、真のお母様と一つにならないければ意味がありません。

また、「王権」を相続すると言われますが、真の父母様は、縦横の八段階を経ながら、まず「長子権」を立てられ、その次に「父母権」を立てられ、その基台の上で「王権」を勝利していかれました。それと同様に、もし、亨進様が「王権」の位置に立とうとされるならば、その前に「長子権」「父母権」を立てなければなりません。では、それらの内容をどのように復帰していかれたと言われるので

しようか。

今現在、亨進様や國進様がしておられることは、真の父母様の一言からかけ離れており、原理的ではありません。私たちは、真のお父様が「みんなの前で語りなさい」と亨進様に命じられた「私（亨進）」が、真の父母様を否定したり、真の父母様に従わなければ、統一教会人たちは、私に従ってはいけません」を思い起こさなければならぬでしょう。

(20) 「天一国四大聖物は、偽物」であり、その聖酒を飲むことは『墮落行為である』という批判に対する応答

天一国四年天曆三月十六日（二〇一六年四月二十二日）の真の父母様御聖婚五十六周年を期して与えられた「天一国四大聖物」伝授および、それに基づく聖酒式について、サンクチュアリ教会側の人は、「天一国四大聖物は偽物である」「聖酒式に参加すると『墮落する』『地獄へ行く』」などの言葉で自分たちになびいた人たちを畏怖、困惑させ、聖酒式に参加させないように仕向けています。このような言動は、救いの道を閉ざすための『サタンの業』と言わざるをえません。私たちは、今回の「天一国四大聖物」の

伝授および聖酒式の意義と価値を、一度確認しておかなければなりません。

与えられた「天一国四大聖物」、およびそれに基づく恩赦は、空前絶後の歴史的な勝利圏に基づいて与えられた恩賜です。

今回の恩赦について、「天一国四大聖物伝授及び聖酒式」の意義と精誠条件」という公文に、次のような説明があります。

「真のお母様は、真のお父様の聖和以降、真のお父様と完全一体を成し遂げられた土台の上で、三年間のこの上ない侍墓精誠を全人類に代わって直接捧げながら、天の父母様に捧げる真のお父様の最後の孝の精誠を共に尽くされた。そして、その基台の上で歴史的に空前絶後の基元節三周年を迎え（た）」（二〇一六年六月二日付、抜粋）

二〇一二年九月三日（天曆七月十七日）の真のお父様の「聖和」以降、人類の「真の父」は霊界におられ、人類の「真の母」は地上界におられるという、歴史上かつてない時代圏を迎えています。真のお母様は、「天正宮本郷苑」で三年間にわたる「侍墓精誠」を捧げられ、二〇一五

年八月三十日に聖和三周年を迎えられました。そうした「侍墓精誠」の基台の上で、私たちは「希望の四年」である天一国四年を迎えました。

その「恩赦」を簡潔に表現すれば、三年間の「侍墓精誠」の基台によって、霊界の真のお父様と、地上界の真のお母様の完全一体が安着し、その勝利圏によって与えられた空前絶後の恩賜であるということです。

① 「天一国聖酒」の恩賜について

基元節聖酒（天一国聖酒）は、真のお父様が地上にいらした時、「天一国基元節」で使用する聖酒として作られ、それを保管するよう清平に指示された聖酒です。今回の「天一国四大聖物」の聖酒は、その天一国聖酒が、真のお母様の三年間の「侍墓精誠」の勝利の基台の上で新たに与えられたものです。すなわち、今回の聖酒は真の父母様（真のお父様と真のお母様）によって与えられたものです。

サンクチュアリ教会側の人は、「（今回伝授された）聖酒を飲むことは『墮落行為である』と批判しますが、これはとんでもない主張です。聖酒は、人間始祖の立場で勝利された真の父母様の勝利権

によって作られた歴史的価値のあるものです。天一国聖酒は、真のお父様が聖和される前、地上において作ってくださったもので、さらに真のお母様の「侍墓精誠」の基台の上で新たに与えられているものです。たとえ真のお父様が霊界に行かれたあとであつても、その勝利権は永遠であり、今も有効です。これは、キリスト教においても、イエス様が「昇天」されて霊界に行かれたあと、パンとぶどう酒による「聖餐式」で霊的救いの恩恵が与え続けられていたのと同じことです。

真のお母様は、「天一国四大聖物」のための祈祷の中で、次のように祈っておられます。

「もう一度、真の父母様の名前で天の父母様に、矜恤のこの聖物を通じて新しく誕生し、永遠の本郷苑に行くことができる影のない、一点もサタン圏内の痕跡がない、そのような姿で故郷の地に行くことができる、最後に真の子女の姿になることができる祝福の恩賜を下さるこの聖物……」

真の父母様は二〇一三年の基元節聖酒式で、祝福家庭と食口たちに対する恩赦

と人籍を与えてくださいました。それは、私たちを「影のない、一点もサタン圏内の痕跡がない、そのような姿」に生み変えてくださる恩恵でした。

しかし、その後の私たちの姿を真の父母様をご覧になり、本然の姿ではないことに對して心を痛められ、「もう一度」恩赦の道を与えてくださったのが、今回の聖酒式です。これは、霊界の真のお父様と地上界の真のお母様が渾然一体となつて与えてくださる恩賜です。

②「天一国聖塩」の恩賜について

「天一国四大聖物」で、従来の聖物と異なる点の一つは、聖塩に新しい意義が付加されたことです。従来の「聖塩」は、万物を聖別するために用いられてきました。ところが、今回の天一国聖塩は、私たち祝福家庭が「聖和」した時、その「聖体（遺体）」を聖別するためにも用いることができるという貴い意義がそこに付加されました。『原理講論』では、死体に関して、次のように論じています。

「人間は墮落により、その死体までもサタンの侵入を受けたのであった。ところがヤコブは、祝福を受けて、聖別された体であつたから、彼の死体も、サタン

と闘つて分立したという条件を立てるため、その死体に、四十日間、防腐剤を塗つたのである。したがって、この路程を見本として歩いたモーセも、その死体をもつてサタンと闘つたのであり、またイエスも、その死体をめぐつて問題が起きた」（三四五～三四六ページ）

ヤコブは、実体的な家庭的勝利圏を立てることができたので、その死体は聖別され、カナンの地の墓地に葬られ、今日においてもヤコブのお墓が伝えられています（創世記五〇・13）。

しかし、モーセは霊的勝利圏しか立てることができず、カナンの地に入ることができなかったため、その死体は行方不明となりました（申命記三四・6）。イエス様の場合も、地上で新婦（真の母）を立てることができず、その肉体がサタンの侵害を受けたため、モーセの時と同様に、その聖体（遺体）は行方不明となりました。

ところが、真のお父様の場合は、地上で人類の「真の母」を立てられ、勝利した「真の父母」となれたため、その聖体はサタンに侵害されることなく、聖別された聖体として「天正宮本郷苑」に安着されました。このことは復帰摂理歴史

上、かつてない大きな勝利です。

ちなみに、真のお父様が「基元節」を前にして聖和されたことから、分派活動をする人で、「お父様は使命を全うできずに聖和された」と語る人がいます。しかし、もしそうであれば、お父様の聖体も、モーセやイエス様と同様に、行方不明となったことでしょう。

しかし、お父様の聖体は「天正宮本郷苑」に安着されました。お父様は「すべて成し遂げました」と祈られて聖和されましたが、今回、真のお母様が三年間の「侍墓精誠」を捧げられた基台の上で、その聖体は、完全に歴史的に「天正宮本郷苑」に安着することができたのです。聖体が安着されたのは、お父様が**実体勝利を成し遂げてから霊界に行かれたこと**の証拠です。

このことは、公文に「**天の父母様に捧げる真のお父様の最後の孝の精誠**」とあるように、霊界における真のお父様の精誠と、地上界における真のお母様の三年間の「侍墓精誠」とが完全に合致して成就された天宙（霊肉界）的な出来事です。真のお父様は、祭祀について次のように語っておられます。

「今までキリスト教で、祭祀を捧げられ

ないようにしたのも一理があるのです。

祭祀は、**神様と全人類の真の父母が受けなければなりません**。上の代の先祖たちが**天でまず侍られなければならない**のです。ところが墮落によつて、それを今までは禁止してきましたが、今や復帰時代において祝福を受けたので、これから先祖たちに侍らなければならないのです」(八大教材・教本『天聖經』一〇八〇ページ)

このように、祭祀は、まず「神様と真の父母」が受けられなければならないかつたものです。ところが、人間始祖アダムとエバの墮落によつてその肢体が「サタンの宮」となってしまうことで、その死体にもサタンが侵入したため、今日までの人類歴史において、神様と真の父母様に対する「祭祀」がなされないまま来しました。

しかし、真のお父様が霊界に行かれ、地上界に真のお母様がおられることで、本来、アダムとエバが墮落していなければ受けるはずであった「神様と真の父母」に対する「祭祀」が、今回、真のお母様の三年間にわたる「侍墓精誠」の勝利によつて、人類史上、初めて成されたということになります。

その歴史的勝利圏を相続する祝福家庭は、各自の聖和後、その聖体（遺体）が自然界に還る時、真の父母様の勝利圏を相続する恩恵として、今回の天一国聖壇によつてその聖体を聖別することが許されるようになるという、今までなかった歴史的恩賜にあずかることができるようになりました。

③「天一国聖土」の恩賜について

今回、「天一国聖土」が分配されたことも、新たな恩賜と言えます。

「聖土」について述べると、真の父母様は二〇〇六年六月十三日に「天正宮博物館入宮戴冠式」を挙行されましたが、その式典を七日後に控えた六月六日、天正宮博物館の前庭で十二人の大陸代表者から世界各地の聖地の土と聖水の奉獻を受け、天正宮博物館の聖土と水を入れて混ぜられ、再創造された「聖土」を再び大陸会長に伝授された経緯がありました。今回の「天一国聖土」は、三年間の「侍墓精誠」を捧げた勝利条件の上で、**真のお父様の聖体が安着した「天正宮本郷苑」の聖土を、全大陸の祝福家庭に分配された**ものです。

この「天正宮本郷苑」の聖土分配は、全世界の祝福家庭を真のお父様に連結し

てくださろうとする真のお母様の特別な計らいがあつて与えられた恩恵です。「聖土」が分配されるということも、今までにはなかった特別な内容です。

徳野英治会長は、これらの「天一国四大聖物」について次のように語っています。

「私たちは、最後の最後まで天の父母様と真の父母様に忠節を貫き、美しい姿で霊界に旅立たなくてはなりません。そうでなければ、私たちは、永遠なる時間、空間の世界である霊界で、**天の父母様と真の父母様と共に暮らすことができないのです。**

霊界で私たちと共に永遠に暮らしたいと誰よりも強く願ってくださいているのが、真の父母様です。そうであるがゆえに真のお母様は、真の父母様ご聖婚五十六周年記念式（四月二十二日）で、貴い天一国四大聖物（聖酒、聖塩、聖燭、聖土）を下賜してくださいました。これは、**霊界の真のお父様とご相談のうえで決断された内容です**」（第三十四回全日本聖和祝祭のメッセージ、「世界家庭」二〇一六年七月号、一七ページ）

このように、真の父母様による「天一

国四大聖物」は、真のお母様の三年間の「侍臺精誠」の条件によつて、霊界の真のお父様と、地上界の真のお母様が相談され、特別に与えられた恩賜であるということです。

それゆえ、サンクチュアリ教会側の人々、およびそれに同調する人が述べている「天一国四大聖物は偽物」「その聖酒を飲むのは墮落行為」「飲めば地獄に行く」、また「今回の四大聖物の伝授は、現代の免罪符もしくは踏み絵である」といった批判や風聞は、「天一国四大聖物」が持つ空前絶後の歴史的意義と価値を分かんず、真のお母様および家庭連合に否定的な人たちが、かつてに「邪推」して語っているものにすぎませんし、自分たちの存在が否定されることを恐れての言動と言えます。

この「恩赦」は、肉身をサタンに侵害されてその「聖体」が行方不明になったイエス様も成しえなかった歴史的内容であり、今まで**歴史上かつてなかったほどの勝利圏によつて与えられた歴史的意義と価値のあるものです**。それは、霊界と地上界の両世界にわたった人類の「真の父母様」によつて与えられた、とてつもなく大きな恩恵です。

それゆえ、サタン側も、この歴史的恩

賜を祝福家庭が受けていくことを非常に恐れており、一人でも多くの人々をその歴史的恵みから漏れさせようと必死になつて「悪口」の限りを尽くし、惑わそうとしているものと言えるでしょう。

私たちは、サンクチュアリ教会側の人々が語る「墮落する」「地獄へ行く」という困惑させる言葉に影響されることなく、霊界の真のお父様と、地上界の真のお母様が一体となつて与えてくださった「天一国四大聖物」伝授と聖酒式による恩赦という、歴史的恩賜にあずかつていかなければなりません。

（21）真のお母様も「メシヤ」である ——第二弾

文亨進様は、「お母様はメシヤではない」と批判しておられますが、この問題については小冊子No1の14・16ページで、すでにその誤りを指摘しました。ところが、いまだにサンクチュアリ教会を支持する人々の中に、それを理解できない人がいます。いま一度、No1の内容を熟読し、その内容を理解すべきでしょう。

『原理講論』に、「メシヤは人類の**真の父母**として来られなければならない」（二七七ページ）とあり、真のお父様は「メ

シヤは**真の父母**です」(八大教材・教本『天

聖經』一九二ページ)と語っておられます。キリスト教は、イエス様だけをメシヤだと考えてきましたが、統一原理においては、メシヤは「真の父」と「真の母」の両者を指して語る言葉です。そこが、従来のキリスト教と異なっている点です。

メシヤは個人メシヤとして、まず男性として来られますが、そのメシヤがメシヤとしての使命を果たし、家庭メシヤ以上になろうとすれば、そこに必ず「本然のエバ」がいなければなりません。

イエス様は、地上で生きておられるときに「真の母」を立てられなかったため、その救いは「霊的救い」という個人救済次元で終わってしまいました。真のお父様は、イエス様が立てることのできなかった「真の母」を立てられ、血統転換の道を切り開かれました。ゆえに、真の父母様を通じた祝福結婚により、真のオリーブの木に接ぎ木される道が生じたのです(『平和神經』三四ページ)。

『原理講論』に、「原罪は、人間が、その真の父母として来られるメシヤによって重生されるのでなければ、取り除くことはできない」(二七一ページ)、「父は一人であらうとして子女を生むことができるだろうか。墮落した子女を、善の子女とし

て、新たに生み直してくださるためには、**真の父と共に、真の母がいなければなら**ない」(二六四〜二六五ページ)とあります。

メシヤがメシヤの使命を果たすには、そこに「真の母」がいなければなりません。それゆえ「真の母」もメシヤなのです。真のお父様は、次のように語っておられます。

「世の中に一つの真のオリーブの木の標本を送ろうというのが、メシヤ思想です。しかし、真のオリーブの木である**メシヤが一人で来てはいけません**。……メシヤが一人で来ては、真のオリーブの木になれないのです。**メシヤとしての真のオリーブの木**と、メシヤの相対となる真のオリーブの木を中心として、これが一つになってこそ、真のオリーブの木として役割を果たすのです」(『永遠に唯一なる真の父母』六八〜六九ページ)

真のお父様は、「メシヤが一人で来てはいけません」と語っておられます。メシヤは「真の父」と「真の母」の二人がそろってこそ使命を果たせるというのです。したがって、真のお母様を否定することは、お父様のメシヤとしての使命をも否定することになります。サンクチュアリ教会側は「真の父」を重んじているかのように振る舞いますが、「真の母」

を否定することで、実際には、「真の父」の勝利圏をも否定していることを知らなければなりません。

(22) お父様と共にお母様も「神様の立場」に立っておられる

①「お母様は既に墮落した」という批判への応答

サンクチュアリ教会側の人は、「お母様は、既に墮落したのであるから、お母様についている信徒は、間違いなく地獄へと審判される」とか、「お母様は、ご自身を神やメシヤと呼び、従順な対象の位置を離れました」と批判します。これは、とんでもない主張です。

真のお父様は、真のお母様が還暦を迎えられた二〇〇三年陽暦二月六日、二度目の聖婚式と家庭王即位式をされましたが、それらの式典について次のように語っておられます。

「神様とアダムとエバは、『家庭王即位式』をすることができませんでした。……その『家庭王即位式』をしたので、神様が、本来の真の父母を中心として、婚姻申告をすることができた時を迎えたということです。……文総裁を中心として、(神様は)婚姻申告をしました。今、

霊界に行けば……。今まで霊界では、神様が見えませんでした。今、行ってみれば、霊界の父母の立場で、**文総裁夫婦の顔が現れて、きらびやかな光で見える**ので、顔を見詰めることができないほど、まぶしくなるということです」(「ファミリー」二〇〇三年五月号、二七ページ)

真のお父様は、平和メッセージで次のように語っておられます。

「アダムとエバが……完成した上で、結婚して子女を生んで家庭を築いたならば、アダムとエバは外的であり横的な実体の真の父母になり、神様は内的であり縦的な実体の真の父母になったことでしょう。……神様は、真の愛を中心としてアダムとエバに臨在されることにより、人類の真の父母、実体の父母としておられ、アダムとエバが地上の生涯を終えて霊界に行けば、**そこでもアダムとエバの形状で、彼らの体を使って、真の父母の姿で顕現**されるようになるのです」(『平和神経』五四〜五五ページ)

「アダムとエバが神様のみ旨のとおり個人完成、すなわち人格完成を成し、神様の祝福の中で夫婦関係を結び、神様と完全一体を成していたならば、神様が彼らの中に臨在し得る因縁が決定してい

たことでしょう。……**完成したアダムとエバの結婚は、神様御自身の結婚になっていたのです**」(同、一七〇ページ)

このように、完成したアダムとエバが霊界に行けば、神様はアダムとエバ(真の父母)の姿をもって顕現すると語っておられます。二度目の聖婚式以降、真のお父様は、神様について「今、(霊界に)行ってみれば……**文総裁夫婦の顔が現れて、きらびやかな光で見える**」と語っておられます。すなわち神様は、お父様のお姿を通してだけでなく、今や、真のお母様のお姿をもつて現れるということです。これが、二度目の聖婚式以降、お父様が語っておられる、お母様の立場です。このみ言^{ことば}で分かるように、真のお父様と真のお母様は、それぞれ完成したアダム、完成したエバであるということです。

『原理講論』には、「愛の力は原理の力よりも強いので、アダムとエバが完成し、神を中心として夫婦となることにより、その絶対的な愛の力によって、神の直接的な主管を受けるようになれば、いかなるものも、またいかなる力もこの絶対的な夫婦の愛を断ちきることができないから、**彼らは決して墮落するはずはなかった**」(二一四ページ)とあります。

完成したアダムと、完成したエバは、「決して墮落するはずはない」という『原理講論』で論じられている原理と照らし合わせると、真のお父様と真のお母様のおふたりは、もはや墮落することはありえないのです。したがって、「お母様は、既に墮落した」と語るサンクチュアリ教会側の主張は、原理と食い違う、非原理的主張であると言わざるをえません。

また、真のお父様は、「**お母様は聖霊です。聖霊に背いては、赦しを受けられないのです**」(天一国經典『真の父母經』四七ページ)と語っておられます。

キリスト教では、「聖霊」を神であると考えてきました。真のお父様は、真のお母様を「聖霊です」と語っておられ、二〇〇三年の二度目の聖婚式以降、前述したように、お母様も「神の立場」に立つておられることを明言しておられます。

事実、二度目の聖婚式後、真のお父様は、名節の時、真のお母様はお父様に敬拝を捧げなくてもよいとされ、さらに二〇〇六年六月十三日の「天地人真の父母様天^{チヨンデヨングン}正宮入宮・戴冠式」以降は、お母様は神様に敬拝を捧げなくてもよくなりました。このように、お父様は、お母様の「位相」を高められ、敬拝の仕方まで変更されました。



写真2

受けなくては、イエスの前に新婦として立つことができない」(二六五ページ)

「イエスが後の^{のち}のアダムとして来られ、後のエバの神性である聖霊を送られることによって、贖罪^{しよくざい}の摂理をされる」(三六三ページ)

「人類の父性の神であられるイエスが来られて、人類の母性の神であられる聖霊を復帰し、めんどりがそのひなを翼の下に集めるように、全人類を、再びその懷に抱くことによって重生せしめ、完全復帰する」(同)

「モーセの路程で、イスラエル民族を導いた昼(陽)の雲の柱は、将来イスラエル民族を、世界的カナン復帰路程に導かれるイエスを表示したのであり、夜(陰)の火の柱は、女性神として彼らを

そして、『原理講論』も、聖霊が

「神」であることを次のように論じています。

「聖霊は女性神であられるので、聖霊を

導くはずである聖霊を象徴した」(三六九ページ)

このように『原理講論』は、聖霊を「女性神」「母性の神」等々と論じています。真のお父様が「お母様は聖霊です」と語っておられるように、私たちは真の母も、神の立場に立っておられることを明確に理解しなければなりません。

②ウイルソン教授による重要な指摘

二〇一六年二月、韓国で行われた「天一国指導者会議」で、アンドリュー・ウィルソンUTS(統一神学大学院)教授は二〇〇六年六月十三日の「天地人真の父母様天正宮入宮・戴冠式」のお写真【写真2】を提示し、サンクチュアリ教会側の誤りについて重要な指摘をしました。ウイルソン教授は、次のように述べています。

「この写真の中に、天一^{てんいち}国の意味がとでも生き生きと現れています。これは二〇〇六年六月十三日に举行された『天地人真の父母様天正宮入宮・戴冠式』の時に撮影した写真です【写真2】。

真のお父様と真のお母様のための二つの王座があり、『父なる神様』と『母なる神様』のための、また他の二つの王座

があります。そして、お父様とお母様の頭の上に、二つの王冠があり、『父なる神様』と『母なる神様』のための、またほかの二つの王冠があります。

この二つのお姿は、『父なる神様』と『母なる神様』としていらつしやる縦的な天の父母様(神様)と、『真のお父様』と『真のお母様』としていらつしやる横的な真の父母様の間で、完全に一致しているのです。一枚の写真の中に見えるこれら全てのものは、正に天一国の基盤です。しかし、サンクチュアリ教会においては、王座の一つを片付けてしまいました」

このお写真で明確なように、ウイルソン教授は、神様と真の父母様とは完全一致しており、真のお父様だけでなく、真のお母様も、神の立場に立っておられる事実を指摘しています。

(23)「二〇一二年八月三日の最後の訓誡会で、お父様は『すべてを壊したオンマ(お母様)と金孝律^{キムヒョル}は責任を取りなさい』と語られた」という批判への応答

サンクチュアリ教会側の人々は、二〇一二年八月三日の最後の訓誡会で、『真のお父様は『すべてを壊したオンマ

（お母様）と金孝律は責任を取りなさい』と語られた」と批判しています。しかし、彼らがアップしている八月三日の訓読会の映像には、それに該当する部分がありません。本当にそのようなみ言を語られたのでしょうか。疑問です。

しかし、もし、そのようなみ言を語られたと仮定しても、聖和される二十一日前の陽暦八月十三日、真のお父様が最後の祈りで「すべて成し遂げました」と祈られたことが決定的な出来事であると言えます。

もし、最後の祈りの時点で、「お母様は、お父様と一体化しておられない」、あるいは「すべてを壊したオンマ」というのであれば、真のお父様は「すべて成し遂げました」とは祈られなかったでしょう。すべてを勝利され、真の父母様は「完全一体」になっておられるがゆえに、「すべて成し遂げました」と祈っておられるのです。

ところで、サンクチュアリ教会側のブログでは、この最後の祈りについて、英語版の天一国經典『天聖經』を引用し、I have accomplished everything for this. と書かれているので、「何故、お父様は『私はI』と言われたのか？ ここは『私たち』または『真の父母』はという言葉が、

お母様への感謝の気持ちと共に来るのではないのか？ それを、敢えて、何故『私は』だけなのか？ これは、お父様の聖和直前まで、お母様はお父様と一体化出来なかったことの証左でもある」（「サンクチュアリNEWS」二〇一六年四月二十四日）などと、かつてな解釈をしています。

しかし、真のお父様の最後の祈りは、韓国語で「私は」という主語はありませんでした。英語という性格上、もともとなかった「I」という主語を翻訳のために挿入せざるをえなかったものと思われる。このように、翻訳した文章のある一部分だけを取ってきて批判に利用することは、恣意的な引用であると言わざるをえません。

私たちは、このような批判に惑わされてはなりません。

（24）「アベル女性UN創設大会」に関するお母様批判への応答——叱責の言葉は、お母様に対して向けられたものではない

サンクチュアリ教会側の人は、以下のように語って、真のお母様を批判します。

「二〇一二年七月十六日、真のお父様

の最後の創設大会の講演『アベル女性UN創設大会』において、真のお父様は、講演文を読むことを一時止められ、大観衆の前で、真のお母様に対し、『自分勝手にやっている』と語られた。真のお父様のその語気の強さから、とてもおふたりが一体化しているとは思えない」

サンクチュアリ教会側は、上記に当たる部分を約一分間の映像にして各方面に送り、真のお母様批判を拡散させています。また、映像の「静止画面」をメールに添付して、各方面に送りつけています【写真3、4参照】。

真のお父様の講演は約一時間二十分の長時間にわたるものですが、サンクチュアリ教会側は、そのうち約一分間だけを切り取って批判に利用しているのです。

しかも、映像の冒頭に「文鮮明師最後のスピーチとなったアベル女性UN創設大会、基調講演での驚くべき発言」という字幕を置くことで、いかにもお父様が真のお母様を批判しているかのように受け止めさせようとミスリードしています。

まず、留意しておかなければならない点は、この時の真のお父様は、講演文を読みながら随時アドリブで様々な内容を語られつつ講演をされた点です。特別に

この部分だけアドリブを挟んで語られたのではありません。サンクチュアリ教会側は「講演文を読むことを一時止められ」と述べ、いかにもこの部分だけで特別なことが起こったかのように述べますが、実際は、お父様は講演全体で、常にアドリブを交えながら語り続けられたことを知っておく必要があります。

サンクチュアリ教会側の表現は、事実とかけ離れたオーバーなものであり、要注意です。

ところで、サンクチュアリ教会側の批判は、真のお父様の講演文全体の流れを無視しているだけでなく、約一分間の映像を詳細に検討すると、お父様の語っておられる内容から大きく逸脱した、ほんでもないものであることが明白となります。



彼らが拡散している約一分間の映像に付されたテロップ（字幕）は、次のようになっています。（注：太字の部分は、講演文。普通体の文字は、お父様がアドリブで語られた部分）

「私たち夫婦が二十年前、本連合の創設時に明らかにしたメッセージの精神に従って、勝利した世界的な女性代表である真の母に侍り、オモニを私が育ててきたよ。オモニはいません。文総裁の妻の位置もいけません。自分勝手にやっている!! 自分勝手に。ん。世界的な女性代表である真の母に侍り、真なる母の像、真なる妻の像を確立し、真の愛の運動によって理想的な家庭を結実させなければならず」

この部分を、忠実にディクテーションして翻訳すれば、次のようになります。

「私たち夫婦が二十年前、本連合の創設時に明らかにしたメッセージの精神に従って、勝利した世界的な女性代表である真のお母様に侍り、お母様を私が育ててきました。母がいけません。文総裁の妻の位置もありません。自分勝手、自分勝手です。世界的な女性代表である真のお

母様に侍り、真なる母の像、真なる妻の像を確立し、真の愛の運動によって理想的な家庭を結実させなければならず」

真のお父様は、ここで聴衆に対して何を訴えておられるのでしょうか。

まず、着目すべき部分が「勝利した世界的な女性代表である真のお母様に侍り」です。真のお父様は、もともとどの講演文で「勝利した世界的な女性代表である真の母に侍り」と、真の母（チャムオモニ）となつていくにもかかわらず、それを「勝利した世界的な女性代表である真のお母様（チャムオモニ）に侍り」と言い換えておられます。この「真のお母様」という部分は、韓鶴子女史を意識された表現であり、その韓女史を「勝利した世界的な女性代表である」と語っておられます。つまり、お父様は、私たちに對してそのような「勝利した世界的な女性代表である」韓女史に「侍り」なさいと命じておられるのです。

続いて、注目すべき部分が、固有名詞と一般名詞の使い分けです。真のお父様は、それに続くアドリブ部分の最初の「お母様」という言葉を、固有名詞で「お母様（オモニム）」と語っておられます。

したがって、そのような「勝利した世界的な女性代表である真のお母様（韓女史）」を「私（お父様）が育ててきました」と語っておられ、これは、真のお父様が、明らかに勝利された真のお母様を誇りに思っておられ、そういう真の母を育ててこられたことを自負しておられる表現です。

ところが、それに続く「母がいません」の文言は、それまでと違い、一般名詞で「母（オモニ）」と語っておられます。サンクチュアリ教会側は、そのような違いがあるのを無視し、いずれの言葉も「オモニ」とカタカナでテロップを入れることで、日本人が見るとき、いかにも韓女史について語っているかのように見えるよう、カモフラージュしているものと言えます。

しかし、「母がいません」という文言は、一般名詞で語られているものであり、これは、今までの歴史において勝利した母がいなかった（しかし、韓女史が初めて勝利した母として立った）ということであり、韓女史を指して語っておられるではありません。むしろ、聴衆や女性一般に向かって、韓女史のように勝利した「母がいません」と語っておられるのです。もし、この部分の「母がいません」が、

韓女史であると仮定するなら、その直前で「勝利した世界的な女性代表である真のお母様に侍り」なさいと命じておられるにもかかわらず、その待るべき「母」がないという話になってしまうため、話が矛盾したものとなります。これでは、存在しない「母」に対し「侍りなさい」と命じる、意味不明な内容となってしまうです。

それに続く、「文総裁の妻の位置もありません」は、そういう勝利した「真のお母様」がもともとおられるわけではないという意味で語っておられます。つまり、独り娘（独生女）としてお生まれになった韓女史にも、「文総裁の妻」、「真の母」として勝利されるまでの過程があり、果たすべき責任分担があつたわけで、そういう勝利した「文総裁の妻の位置も（もともとあるのでは）ありません」という意味です。

そして、「自分勝手、自分勝手です」と叱責しておられるのは、女性一般に対して語っておられる言葉です。事実、真のお父様が語っておられる映像を見ると、この時聴衆に向かって、語気強く語っておられます。

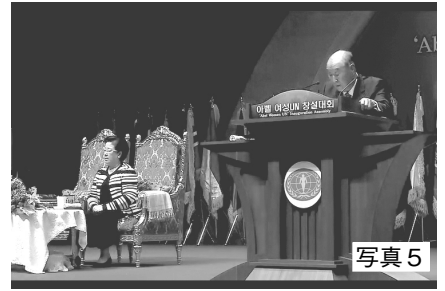
だからこそ、真のお父様は、聴衆に向かって再度、勝利された「世界的な女性

代表である真のお母様に侍り」と繰り返して語られたうえで、そのお母様に侍ることとで「真なる母の像、真なる妻の像を確立し、真の愛の運動によって理想的な家庭を結実させなければ」ならないと命じておられるのです。

したがって、「大観衆の前で、真のお母様に対し、『自分勝手にやっている』と語られた。真のお父様のその語気の強さから、とてもおふたりが一体化しているとは思えない」というサンクチュアリ教会側の批判は、講演文の流れと真のお父様の真意を無視し、それをねじ曲げた、とんでもない批判です。お父様ご本人をおとしめていると言っても過言ではありません。

事実、彼らが拡散している約一分間の映像にない、前後の部分を確認すると、真のお父様が「自分勝手、自分勝手です」と厳しい口調で叱責しておられる時、真のお母様はお父様のすぐ近くに座っておられます【写真5参照】。

にもかかわらず、真のお父様は真のお母様を一切見る素振りはなく、むしろ会場を見渡すかのように聴衆に向かって「自分勝手、自分勝手です」と語っておられます。これを見ても、この言葉はお母様に対して語っておられるものでない



のは明らかです。

また、講演文全体を通して見るとき、この叱責の言葉は、真のお母様に対してではないことがより明白となります。

ぜなら、お母様を叱責される意味に受け取れる表現が講演文に全くないからです。むしろ、講演文の冒頭の部分で、真のお父様は会場の聴衆に対し、「私の妻である韓鶴子総裁と共に、心から歓迎いたします」と三回も繰り返し語っておられますし、さらに再三にわたって「韓鶴子総裁と共に」、「私たち夫婦」、「真の父母」という表現を繰り返し語っておられることから考察すると、お父様は、勝利された「真の母」である韓女史と共に、勝利された「真の父母」として、この講演をしておられるのは疑いがないことです。

私たちは、このような文脈を無視した、サンクチュアリ教会側の事実をねじ曲げた批判に惑わされてはなりません。

(25)「アベル女性UN創設大会」のお父様の「神観」に関する重要な名言——「母のいない父」を神様だといって争う愚かさについて

私たちは今まで、神様を「天のお父様」と呼び、神様を父としてのみ捉えてきました。私たちは、真のお父様のみ言に「神様は縦的な真の父母であり、アダムとエバは横的な真の父母です」(八大教材教本『天聖經』一六六〇ページ)とあり、また『原理講論』にも「父母なる神」(六一ページ)、「父母としていまし給う神」(九二ページ)、「天の父母なる神」(二三五ページ)等々と記されていることに対し、ある意味で無頓着でいたように思われます。真のお父様は「アベル女性UN創設大会」の講演で、この神観の問題について重大発言をされました。お父様は講演文を読まれる前に、約三十分間、前提としての話をすると言われ、次のように語っておられます。

「今に至るまで、数多くの宗教がありますが、父なる神様を信じる宗教にはありませんが、母のいない宗教を信じてきたという恥ずべき、恥ずかしさをこの時

間に爆発させ、その歴史的な、あつてはならないその悲運の痕跡を取り消すために……私の歩む道は、平和な道ではありませんでした」

「母(なる神)がいません。父なる神様は知っていますが、母のいない父を自分の神様だといって争い、奪い合う戦いをするこの教団どもの愚かさ」と国の権威の喪失を、誰が是正してあげるのですか」

真のお父様は、今までの宗教が、神様を「天の父」としてのみ捉え、「母なる神様」でもあることを理解してこなかった事実に対し「恥ずかしさをこの時間に爆発させ」と訴えられ、「母のいない父を自分の神様だといって争い」合ってきたことを「愚かさ」と表現されました。

この問題に関連して、「(22) お父様と共にお母様も『神様の立場』に立っておられる」で、サンクチュアリ教会側の誤りを次のように指摘しました。

ウィルソン教授は、二〇〇六年六月十三日の「天地人真の父母様 天正宮入宮・戴冠式」で、真のお父様がセッティングされた王座や王冠の写真【写真2】を示しながら、「真のお父様と真のお母様のための二つの王座があり、『父なる神様』と『母なる神様』のための、また

他の二つの王座があります。そして、お父様とお母様の頭の上に、二つの王冠があり、『父なる神様』と『母なる神様』のための、またほかの二つの王冠があります。……これら全てのものは、正に天^{いちごく}一国の基盤です。しかし、サンクチュアリ教会においては、王座の一つを片付けてしまいました」と、サンクチュアリ教会側の重大な誤りを指摘しています。

真のお父様は、神様を「天の父」としてのみ理解するのではなく、「天の母」としても理解しなければならぬことを明確に打ち出しておられます。

真のお父様は二〇一〇年一月一日午前零時の祈祷で、「愛する天の父母様（神様）。地上に相対的立場に立った地上の父母様を一体化させて天正宮博物館を建て……」と祈られ、天の父母様と地上の父母様は相対的立場であり、（お写真で見られるように）一体化されていると強調されました。この「アベル女性UN創設大会」で、お父様がその前提として訴えられた内容と合わせて考えると、神様を「天の父母様」とお呼びすることの正しさを改めて確認するものです。

それと同時に、サンクチュアリ教会側が「天のお父様」という呼び名にこだわりの、さらに、「真のお母様」の王座を片

付けてしまった行為が、いかに真のお父様の願いから逸脱したものであるのかを実感せざるをえません。この一点を見ても、サンクチュアリ教会側は、お父様と一体となっていない事実が分かります。

(26) 分派のみ言改竄^{かいざん}に要注意

①「お母様は墮落の血統をもって生まれた」という主張について

文亨^{ぶんけい}進様は説教で、二〇〇三年十月一日の真のお父様のみ言を引用し、「皆さんはサタンの教会へ通っています。サタンの教会！ お父様のみ言ではっきり語っていました。『真のお母様は墮落した天使長の血統から来ました』と述べ、家庭連合を批判しておられます。

このみ言引用は、悪意があると言わざるをえません。正確なみ言は、次のようになります。

「お母様も墮落した天使長の血統を受けた人です。先生までもそうです、先生までも。ですから、絶対信仰、絶対愛、絶対服従で再創造しなければなりません」（マルスム選集四一九―二〇二）

真のお父様は、「お母様も墮落した天使長の血統を受けた人です」に続いて「先

生までもそうです」と語っておられます。にもかかわらず、「先生までもそうです」を省略し、真のお母様だけがそうであるかのように引用します。お父様はイエス様についても次のように語っておられます。

「アダムは神の独り子でした。……神が直接つくった絶対なる独り子でした。エバもそうです。……独り子のイエス様と墮落する前の独り子とはどちらが貴いですか？ 墮落しなかった場合には、アダムですか、イエス様ですか？ （アダムです）。どうしてですか？ アダムは神からつくられましたが、イエス様は墮落した後孫の女から生まれてきたのです。キリスト教はこれを知らなければなりません。数千代の汚れた血統を条件的基盤に植えて、それを条件的な立場によつて独り子として生まれたように認めたのです」（『本郷』三二〇―三二一ページ）

真のお父様は、マタイによる福音書第一章の系図にあるように「イエス様は墮落した後孫の女から生まれてきた」と語っておられます。「お母様も墮落した天使長の血統を受けた人です。先生までもそうです」というみ言は、イエス様に

ついで語られたみ言ことばと同じ主旨で語っておられるものです。『原理講論』に「マタイ福音書の冒頭を見れば、イエスの先祖には四人の淫婦があつたということを知ることができる。これは万民の救い主が、罪惡の血統を通じて、罪のない人間として来られてから、罪惡の血統を受け継いだ子孫たちを救われるということを見せてくださるために記録されたのである」(五七三ページ)と記されているように、救い主は「罪惡の血統を通じて」生まれてきます。「墮落した天使長の血統を受けた人」とは、まさにそのことを言っているのです。したがって、亨進ヒョウジン様のみ言引用には「問題あり」と言わざるをえません。

他にも、み言引用において注意しなければならぬ点があります。それは翻訳の問題です。サンクチュアリ教会側や郭クワクグループ側に立つ日本人メンバーが、真のお母様批判のために引用する彼らの日本語訳のみ言には、以下のようなものがあります。

「皆さん、オモニは生まれながらに王女のように生まれ、オモニのように再臨主の妻として生まれたと思いますか？
言ママって見なさい。墮落した血統をもって

生まれました」(四六一―二六、二〇〇四年七月十九日)

彼らは「墮落した血統をもって」と翻訳すること、いかにもお母様は原罪をもって生まれておられるかのようにに印象づけようとしています。しかし、原文は「타락한 핏줄을 받고 태어났어요」であり、「もって」と翻訳した「받고」は、「受けて」と翻訳すべき言葉です。したがって、「墮落した血統を受けて生まれました」になります。

これは、前述の「お母様も墮落した天使長の血統を受けた人です。先生までもそうです」というみ言の「受けた」と同じ意味合いとして理解すべきものです。

ところが、サンクチュアリ教会や郭グループ側の人は、「墮落した血統をもって生まれました」と変えて翻訳することで、私たちを誤導しようとしています。私たちは、真のお父様が次のようにみ言を語っておられることにも留意すべきです。

「人間自体の主人として来る再臨主もサタンの血統に乗ってきたのです」(マルスム選集四四四―一九七、二〇〇四年四月四日)

「先生も神様の墮落していない父母の血肉を通して現れたではありません。」

……その中からどのようにして真の父母が現れることができるのでしょうか」(マルスム選集四八一―四八、二〇〇五年一月一日)

これらのみ言は、ほぼ同じ年代において語られており、同じ脈絡のみ言として理解すべきものと言えるでしょう。結局、「받고」(受けて)というのは、真のお父様も真のお母様もイエス様も、同じように「墮落の血統」の中から生まれてきたという意味にほかなりません。

②「父子協助時代」のみ言改竄かいざん

サンクチュアリ教会側の人は「父子協助時代」のみ言を悪用し、「摂理の流れから見て、一九九二年から一九九九年までは『女性の時代』であり、『真のお母様』を中心とした摂理です。……しかし、二〇〇〇年からは『父子協助時代』に入りました。お父様は、二〇〇〇年一月五日のみ言で、『国家時代を越えて、アボジを中心に連結された時、オモニではありません。これで一つになると、オモニは長子に任せるので父子協助時代になるのです。父子協助時代になると、ここですべて終わるのです」(マルスム選集三一四―二三〇)と語っておられ、お母

様を中心とする時代は終わり、今や亨進様を中心とする時代が来ている」などと主張します。（この部分の翻訳の問題については後述）

しかし一九九九年の「九・九節」のみ言、および二〇〇〇年十一月十一日にハワイで宣布された「父子協助時代」のみ言は、真のお父様が母の国日本を救うための措置として宣布されたもので、真のお母様について語られたものではありません。

一九九九年、本来なら日本で「祝福結婚式」を挙行すべきでしたが、それができなかった時、真のお父様は「父子協助時代」を宣布され、日本の救済措置を取られました。お父様は次のように語っておられます。

「米国が、日本よりも先立つようにしようと思います。長子が、エバよりもさらに悪いのです。……エバが墮落したあと、実を結んだのが長子なので、長子である米国を通してエバがついていけば、韓国に来やすいというのです。……今後、皆さんが責任を果たせなくなれば、米国についてきなさいというのです。そのため、先生が、すでに母子協助時代を否定してしまい、父子協助時代を宣布しました。なぜでしょうか。日本を放り出して、父子協助時代において息子について

いき、母がいなくても、父と息子が一つになれば、母はどこでも、いつでも求めることができるというのです。

孝律^{ヒョル}は知っているでしょう？（「は

い」。どこに行つて、父子協助時代を發表しましたか。どの島で？（「ハワイにあるカウアイ島です……」。日本語で、カウアイ島です、カウアイ島。その島に行つて、父子協助時代を宣布しました。……（日本は）長子の世界を、滅ぼしてしまおうとしたでしょう。それを直して、それ以上のものをつくつて男の前に立てなければ、復帰される母の道がないと見るので、そのような危険性があるので、先生が、母子協助時代を通り過ぎて、父子協助時代を、すでにハワイのカウアイの地を中心として宣布したのです」（「マ

ルスム選集四五―一二二六、二〇〇四年五月二十九日）

このように、真のお父様は「母子協助時代」「父子協助時代」について語られるとき、明確に、母の国としての日本を念頭に置かれていたのです。

以下、「父子協助時代」に関する分派側の問題ありの翻訳を指摘します。ある人物のブログは次のように翻訳します。

「今までの復帰歴史において母子が協助して来ましたが、その母子協助時代が過ぎたのです。蕩滅の歴史は母子、オモニと息子娘が犠牲となつて復帰しましたが、九・九節を宣布して南北統一が成される運勢圏に入り、統一される日には父子協助時代に入ります。オモニはいなくてもかまいません。オモニはいくらでも探し立てることができます」（三〇三―二六四）

原文は次のようになります。

「米国は天使長国家であり、韓国はアダム国家ですが、父と息子が一つにならねばなりません。分かりましたか。今までの復帰歴史においては母子が協助してきたのですが、その母子協助の時代が過ぎていくのです。蕩滅の歴史は母子、母と息子、娘が犠牲になつて復帰しましたが、『九・九節』を宣布し、南北が統一される運勢に入つて統一されれば、父子協助の時代に入ります。母はいなくてもいいです。母はいくらでも探し立てることが出来ます。……日本が今まで責任を果たせなかったもので、韓国に接ぎ木してきました。韓国の大統領と米国の大統領も一つになるのです。それが一つになつてこそ、金正日^{キム・ジョンイル}が消化されう

「るのです」

このブログは、母の国日本を指して語られている「어머나(母)」をそのまま「オモニ」と翻訳することで、あたかも真のお母様について語っているかのように思わせます。しかし、ここで言う「母」はエバ国家について語っているものです。真のお父様は日本の代わりにカナダやフィリピン等をエバ国家の候補としてお考えになったことがあります。

また、同ブログは前述の二〇〇四年五月二十九日のみ言を次のように翻訳します。

「先生がすでに母子協助時代を否定し、父子協助時代を宣布しました。なぜ?〈中略〉父子協助時代に息子に従って、オモニがいなくても、父と息子がひとつになれば、オモニはどこからでも、いつでも連れて来ることができるといのです。孝律には分かるでしょう?」(マルスム選集四五―一二七)

しかし、先ほど示した二〇〇四年五月二十九日のみ言から、中略としている箇所の前後を照合すると、次のようになっていることが分かります。

「……父子協助時代を宣布しました。な

ぜでしょうか。日本を放り出しても、父子協助時代において息子についていき、母がいなくても、父と息子が一つになれば、母はどこでも、いつでも求めることができるというのです……」

このブログは、「日本を放り出しても」を中略し、日本について語っていることを隠蔽したうえで、「オモニがいなくても」ということで、真のお母様がいなくてもいいという意味に読めるようみ言を改竄します。次の翻訳も悪質です。

「文総裁につなげれば生きるのです。地獄を撤廃して神様王権即位式を行わなければなりません。『母子協助時代と父子協助時代は根本的に違うものです。父子協助時代、生命の種を抱いて育てようとする女性は、夫に対して絶対服従しなければならぬのです』」(マルスム選集三四〇―四二)

『』でくくった部分は、真のお父様がハワイで日本救済のために「父子協助時代」を宣布したみ言の訓読箇所です。その訓読前、お父様が語られた内容と訓読部分を組み合わせ、意図的にみ言を作り変えています。さらに次のような悪意のある翻訳をしま

す。

「国時代を越えて、アボジを中心に連結された時、オモニではありません。これで一つになると、オモニは長子に任せるので父子協助時代になるのです。父子協助時代になると、ここで全て終わるのです」(マルスム選集三四―三三〇)

このみ言は、真のお父様が各家庭の母親について語った内容であり、「オモニ」は各家庭の母親であり、「アボジ」は各家庭の父親のことです。つまり、お父様は家庭的四位基台復帰の話として、カイン・アベルを母親が母子協助で收拾したなら、父親が正しい位置に立つので母子協助時代が終わって父子協助時代になると話しておられます。それを「オモニ」とすることで真のお母様のことを語っているかのように思わせようとしています。この人物は何を目的として、このような数々の改竄行為をするのでしょうか? お母様をおとしめることで、統一家の一体化をさせないよう「分裂」をもくろんでいるのでしょうか?

真のお父様は、「父子協助時代」になったので真のお母様は必要ないと語られたことはありません。『原理講論』に、「父は一人です。どうして子女を生むことができるだろ

うか。墮落した子女を、善の子女として、新たに生み直してくださるためには、真の父と共に、真の母がいなければならぬ」(二六四―二六五ページ)とあるように、人類の最後の一人が救われるまで真の母は絶対に必要です。今や、家庭連合時代になりましたが、お父様は一九九七年四月八日の「世界平和統一家庭連合時代の開臺宣布」で、次のようにみ言を語っておられます。

「歴史以来、長子と次子が一つになって、母親を天のように侍るといふ伝統を立てることができなかったのです。本来の母親が現れなかったからです。今は本来の母親が、長子権復帰と父母権復帰をして、母親復帰圏に入ったので、母親を中心として見るとき、長子と次子は母親の名のもとに絶対服従しなければならぬのです。服従するようになれば父と連結します。父の代を引き継がなければなりません。……母の伝統を受け継ぎ、父母の伝統を受け継いで代表となるのが長子であり、長子と長子の伝統を受け継ぐのが次子なのです。それゆえ、父の命令に対して母が絶対服従し、母の命令に長子が絶対服従し、長子の命令に弟が絶対服従しなければならぬのです。……そのような家庭にならずしては、神様に侍る家庭にはなれないのです。これが原理

的な総観です」(『主要儀式と宣布式Ⅲ』一五二ページ)

神様に侍る家庭となるには、子女(カイン・アベル)は母の命令に絶対服従しなければならぬと語っておられます。これが「原理的な総観」であるということです。まず、真の父母様に侍り、真の父母様と二つになることが信仰の生命線です。

(27) 人間始祖である「真の父母」に後継者は存在しない

①「真の父母」は唯一無二

サンクチュアリ教会を支持するある人物は、「真のお父様が後継者に亨進様を任命の日以後、真のお父様が後継者を韓オモニに変更された根拠となるみ言を提示してください。父子協助時代の今、父子関係でない韓オモニが後継者になっていることは原理的ではない」などと述べ、真のお母様を批判します。

しかし、この批判は、真のお父様のみ言に反する非原理的な主張です。

「真の父母」とは、人類の人間始祖の立場に立たれた唯一の方です。したがって、「真の父母」に後継者が現れると主張すること自体が、非原理的主

張にはなりません。

真のお父様は、古稀(七十歳)を迎えられた一九九〇年、モスクワ大会(世界言論人会議)の勝利の基台の上で、同年四月三十日から五月二十二日にかけて韓国十二カ都市を巡回して「勝利帰国報告大会」を挙行され、「真の父母宣布」すなわち「メシヤ宣布」をされました。古稀を迎えられたお父様は、その大会の約一カ月前に次のように語っておられます。

「これからは先生がいなくても、お母様一人のみ旨に何の支障もないということです。今までは、女性が天地を代表する摂理の代表者として立つことはできなかったのですが、父母の愛と一体的理想を中心として、初めてお母様を中心とする女性全体の解放圏が地上に宣布されたのです。……真の父母の聖婚から三十年たつて女性解放を宣布したということです。ですから、先生が一人でも真の父母様の代身であり、お母様が一人でも真の父母様の代身です。『レバレンド・ムーンが古稀を過ぎて七十を超えたので後継者が現れないのか?』そんな言葉はやめなさい。……ですから、先生が第一教主、その次に、お母様は第二教主だということです」(マルスム選集二〇一―

一二六、一九九〇年三月二十七日)

真のお父様が「後継者……そんな言葉はやめなさい」と語っておられるように、「人間始祖」であられる「真の父母」に、後継者は存在しません。もし、立つとしても、それはあくまでも真の父母様の「代身者」であり、信仰の「相続者」です。たとえ真の子女様であつても、それは「子女」であつて、人類の「真の父母」になることはできません。

真のお父様は「真の父母」について、次のように語っておられます。

「真の父母様は、一組、だけです。今この時の一度だけだということです。過去にもいなかったのであり、未来にもいません。真の父母様が肉身をもつて実体で存在するのは、この時だけだということです。永遠の中でたつた一度です」(マルスム選集二四六―八四)

「アダムとエバは、神様が本当に願う真の人類の先祖、人類の真の父母にならなければならなかったのです。……それにもかかわらず、アダムとエバは、勝利的な実体として現れることができませんでした」(八大教材・教本『天聖經』二二七七ページ)

「堕落がなかったならば……アダムとエバは、真の愛による理想的な真の夫婦になり、さらには真の父母となつて、その子孫と全人類の真の先祖になつていたはず」(同、一三六九ページ)

「真の父母」とは、本来、アダムとエバが墮落しなければ、人類の根本先祖として、人類という「血族」の出発点、すなわち勝利された「人間始祖」に位置する存在です。しかも、その「真の父母」は、実体を持った「神様の立場」でした。真のお父様は「平和メッセージ」で次のように語っておられます。

「アダムとエバが完成して完全一体を成した愛の実体になれば、そこに神様が臨在して人類の真の愛の父母になろうとされたのです。……神様は、真の愛を中心としてアダムとエバに臨在されることにより、人類の真の父母、実体の父母としておられ、アダムとエバが地上の生涯を終えて霊界に行けば、そこでもアダムとエバの形状で、彼らの体を使つて、真の父母の姿で顕現されるようになるのです」(『平和神經』五四―五五ページ)

人間始祖アダムとエバが完成して人類

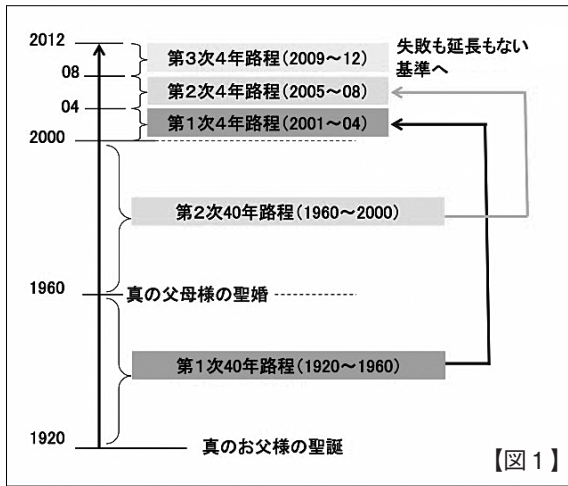
の「真の父母」になれば、彼らは実体を持つ「神様の立場」に立つようになつていました。「真の父母」は唯一無二であられ、「人間始祖」を表す概念であることが明確に分かれれば、その「真の父母」に對し、真のお母様と子女様を比較して、「どちらが後継者か」といつて論ずること自体が、実に愚かな議論です。

人類の「真の父母」が顕現された今日、真のお父様と真のお母様に代わつて「真の父母」になりうる人は他にいません。いかに優れた子女様であつても、人類の「真の父母」にはなれないのです。だからこそ、お父様は「先生が一人でいても真の父母様の代身であり、お母様が一人でいても真の父母様の代身です」、「後継者……そんな言葉はやめなさい」と語っておられるのです。

②天一国の中心は「真の父」と「真の母」である

前述したように、サンクチュアリ教会を支持するある人物は、「父子協助時代の今、父子関係でない韓オモニが後継者になつてゐることは原理的ではない」と愚かなことを述べ、真のお母様を批判します。

この分派の「父子協助時代」のみ言改



竄^{さん}と悪用については、(26)の「分派のみ言改竄に要注意」の②「父子協助時代」のみ言改竄で論じています。簡潔に述べると、「父子協助時代」の宣布とは、真のお父様が母の国、日本の救済措置のために宣布されたもので、真のお母様のことを語っておられるではありません。真のお父様は、「父子協助時代」になったので真のお母様は必要ないと語られたことはありません。むしろ、世界平和統一家庭連合時代の開幕宣布で、「長子と次子は母親の名のもとに絶対服従しなければならぬのです。服従するようにしなければ父と連結します」(『主要儀式と宣布

式Ⅲ』一五一ページ)と語られ、子女である長子と次子は「母」に絶対服従してこそ、父に連結すると語っておられます。

この「母」を通じてこそ「父」に連結するという原則は、家庭連合に限らず、キリスト教においても同じことです。聖書に「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」(コリントⅠ二13)とあるように、霊的眞の母であられる聖霊を通じてこそ、霊的眞の父であられるイエス様に連結されることを知らなければなりません。

ところで、真のお父様は、本来なら二〇〇〇年までに全ての摂理を終えようとしておられました。しかしそれができなかったため、お父様は次のように語っておられます。

「八十歳でカナンを復帰して天下統一をしなければならなかったにもかかわらず、それができなかったのです。……まだアベル・カインが残っているのです。……アベル・カインの撤廃を宣布したので、す。そして、今から百二十年(百二十歳)になる時までに、すべてを終えなければなりません。……それを管掌する先生は、最初の四十年、八十歳までの四十年、今の四十年をそれぞれ四年として、

二〇〇一年から二〇一二年まで、九十二歳を中心とする二〇一二年までにすべてを終えるのです」(『後天時代と眞の愛の絶対価値』二五五ページ)

【図1】のように、戦後のキリスト教の不信によって失った第一次四十年路程、および真の父母を支えきれなかった統一教会における第二次四十年路程を、それぞれ四十年路程として蕩滅^{とうげつ}し、失敗も延長もなかった基準を立てるために歩まれた二〇〇九年から二〇一二年までの第三次四十年路程がありました。

二〇〇一年から二〇一二年に至る期間において、それぞれの四十年路程の出発点である二〇〇一年一月十三日の「神様王権即位式」【写真6】、二〇〇五年二月十四日の「天宙統一平和の王戴冠式」【写真7】、二〇〇九年一月三十一日の「万王の王神様解放圏戴冠式」【写真8】のお写真を見ると分かるように、その摂理の中心は、どこまでも天の父母様(神様)と眞の父母様であり、子女様ではありません。

この三次にわたる四十年路程の計十二年間の出発点に位置する二〇〇一年一月十三日の「神様王権即位式」のお写真【写真6】を見れば、眞の父母様の座られた



写真7
2005年2月14日 天宙統一平和の王戴冠式



写真9
2006年6月13日 天地人真の父母様天正宮入宮・戴冠式



写真6
2001年1月13日 神様王権即位式



写真8
2009年1月31日 万王の王神様解放圖戴冠式

椅子の背後には神様の白い玉座が二つあり、神様は「天のお父様」と「天のお母様」であられることが分かります。

すでに(22)の「お父様と共にお母様も『神様の立場』に立っておられる」で論じたように、二〇〇六年六月十三日の「天地人真の父母様天正宮入宮・戴冠式」のお写真【写真9】でも分かるように、永遠なる「天一国」の基盤、およびその中心は、どこまでも天の父母様と真の父母様であって、決して真の子女様ではありません。「第二代王」などという

概念はないのです。

『原理講論』に、「イエス以後においては、イエスと聖霊とが、直接、信徒たちを導かれたので、それ以前の摂理時代のように、ある一人の人間を神に代わらせ、全体的な摂理の中心人物として立てられたのではなかった」(四六九ページ)とあるように、「真の父母」が現れたなら、それ以前の時代の摂理のように、ある一人の人間を神に代わらせて導かれるのではなく、どこまでも**神様の実体として顕現された「真の父母」**が、直接導いていくことを知らなければなりません。天一国の永遠の中心は、天の父母様と真の父母様であり、子女はその真の父母様の「代身者」、信仰の「相続者」にすぎません。前述したように、どんなに優れた子女様であっても、「真の父母」に代わって後継者となることはできないのです。

今は実体的天一国の実現、完成に向かって歩んでいる「ビジョン二〇二〇」の間です。私たちは、天の父母様および真の父母様(霊界の真のお父様、地上の真のお母様)を中心として歩んでいかなければなりません。

真のお父様は、二〇〇八年四月六日、ハワイで「真の母およびアベル・カイン一体化の特別式」【写真10】を挙行され、

真のお母様を真ん中に顯進様、國進様を立てられ、互いに手をつなぐよう指示されて次のように語られました。

「あなたたちカインとアベルが**お母様の言葉に絶対服従しなければなりません**。……あなたたち兄弟同士で争って分かれることはできません。それが父母を殺した元凶です。ですから、我知らず憎み、声聞くのも嫌で、歩いて行くのを見れば、後ろからついていって殺したい思いが出てきます。あなたたちに、我知らずそのような思いが出てくるというのです」(「ファミリー」二〇〇八年六月号、三〇ページ)



真のお父様が語っておられたように、まず「真の母」を中心に子女が「真の母」に絶対服従して一体化すること、「真の母」につながり、そうして「真の父」に



写真11



写真12

連結されることが、神の摂理を進めていく最大のポイントです。

もし、それが成されなければ、真のお父様が語っておられたように「**それがお母を殺した元凶**」になっていく事実を知らなければなりません。

(28) 二〇一二年一月十九日の「**宣布式**」の真相——子女様と祝福家庭の不足をとりなしされるお母様

すでに小冊子No1の二、(4)で扱った問題(19～21ページ)ですが、サンクチュアリ教会側の人は、「二〇一二年一月十九日の訓読会で、真のお父様は、真のお母様を否定され、『皆、お母様と一団となって違う別の道を行っている』、『お母様が、私の言葉を聞きなさいとするのは、ルーシエルよりももっと恐ろしい存

在だ。そんなお母様に従う者は小鬼だ。

こいつら、『私は今独りだ、息子も娘もない』と語られた。お母様は、お父様と『最終一体』になっているとは言いがたい」と述べ、真のお母様を批判します。この批判は「メモ情報」に基づく正確で悪意のあるものですが、この訓読会で、真のお父様は次のように「**宣布**」しておられます。【写真11】

【中国と(旧)ソ連が、これから問題です。それを一つにするのは、おまえたちがしなければなりません。分かりましたか。おまえたちが果たすべき責任ですが、おまえたちができないので、このような条件をすることによって、霊界が代わりに、このような式をしてあげることによって、**お母様が前に立つようになれば、全部、従って、お母様がするとおりについていけば簡単なのです**。私、お父さんの心配、今やお母様に対する心配は、**する必要がないのです**。……さあ、天地に、この日を期して、完全に統一、一体圏を、真の父母と共に、子女たちと共に、全世界が**一つになって成立した条件**をお祝いいたします。ありがとうございます。敬拝。拍手。真の父母の名前で、聖婚、完結完成、解放圏が勝利の条件を立てて、自由に、天に飛んでいきなさい！アー

デユ！」

この宣布式は、まず真のお母様を先頭に立て、後ろに石俊湊氏、尹晶老氏、黄善祚氏、金孝律氏の四人を立たせて行われ【写真12】、その後、真のお父様の横にお母様が立たれ、四人の向きを変えて行われました【写真11】。この宣布は、当時、國進様、亨進様を中心とする教会体制がお父様の願いに一致することができず動いているのをお父様がお知りになり、その問題に対して、お母様を厳しく叱責して収拾されたものです。

この宣布は、真のお父様が「お母様が前に立つようになれば、全部、従って、お母様がするとおりについていけば簡単なのです。……お母様に対する心配はする必要がないです」と語っておられることで分かるように、どこまでも真のお母様を前に立てて宣布しておられるものです。サンクチュアリ教会側の人が言うように、お父様が「**お母様を否定され**」たという内容ではありません。

私たちが知っておかなければならないことは、子女であるカイン・アベルは真のお母様を中心に一体となり、まず「真の母」につながり、それから「真の父」に連結していかなければならない原理原則がある点です。すでに(26)(27)の

項目で述べたように、世界平和統一家庭連合時代は「長子と次子は母親の名のもとに絶対服従しなければならぬのです。服従するようになれば父と連結します」〔主要儀式と宣布式Ⅲ〕一五一ページ、「あなたたちカインとアベルがお母様の言葉に絶対服従しなければなりません」〔ファミリ―〕二〇〇八年六月号、三〇ページ」というものであり、子女は「真の母」を通じて「真の父」に連結されなければなりません。この原則は、祝福家庭にも当てはまり、真のお父様は

「お母様を中心としてカイン（祝福家庭・アベル（真の子女）が一つにならないければなりません。お母様と一つにならないで、ういてこそ先生と一つになるのです。霊界もそうであり、地



上もそうです。先生と、神様と、です」〔マルスム選集二六五―三一〇〕と語っておられます。これは、霊界でも、地上でもそうだというのです。

顯進様の場合、「真の母」を通じて「真の父」に連結される原則から外れたため、真のお父様はその活動をお受けになることができませんでした。しかし、以前の國進様、亨進様は、自分たちの活動を真のお母様に報告し、「真の母」を通じて「真の父」に連結されていたため、お父様はその活動を祝福されました。今起こっているサンクチュアリ教会問題は、以前と違って、國進様や亨進様が「真の母」と一体となっておられないことが問題なのです。

さて、当時、子女様を通じて日本に伝達されていた情報に、二〇一二年一月二十三日（第四十五回「真の神の日」）に三度目の聖婚式（神様の結婚式）が挙行されるという内容がありました。「KMS中和新聞」（通巻四四六号）の「今日の摂理解説」は、「当初、天基三年天曆一月一日午前十時より『天地人真の父母様聖婚式（神様の結婚式）』を予定し、準備を進めていましたが、このたびは延期され、二〇一三年一月十三日の『基元節』に合わせて執り行うことになりました

た。それゆえ、天曆一月一日午前十時の式典は……『天地人真の父母様九十三聖誕金婚および禧年・古稀』という名称になりました」と解説しています。

「神様の結婚式」から「天地人真の父母様九十三聖誕金婚および禧年・古稀」に名称変更された式典は、真の父母様が結婚式で着るような白い洋服を召され、子女様がサポートなさる中、天曆一月一日午前十時から挙行されました。【写真13、14】

いわゆる「郭グループ」側が最近、日本で集会を行って配布している書籍には、「文亨進ら統一教会は、二〇一二年一月二十二日『真の父母誕生日』に韓鶴子と神様の結婚式があると宣伝してきたが、創始者の反対により取消しとなったという噂が広まった。一月十九日と二十一日、創始者が韓鶴子を責めた理由が、創始者の許可なしに進めてきた韓鶴子と神様の結婚式である可能性が高い」（二〇〇―二〇一ページ）とあります。この情報はうわさに基づくために不正確であり、正しくは一月二十三日に行う予定であると子女様を通じて伝えられていた真のお父様と真のお母様による「三度目の聖婚式」であり、それは「一月二十二日『真の父母誕生日』」でもなければ、「韓鶴子と神様の結婚式」



写真15



写真16



写真17



写真18



写真19

でもありません。このうわさはさらに変貌し、最近では「一月十八日、金孝南氏（キムヒョナム）が主礼に立ち、神様とお母様の結婚式を決行した」とか、「お母様は悪神と結婚した」という誤ったうわさになっていることにも留意する必要があります。

真のお父様の願いは「三度目の聖婚式」を二〇一三年天曆一月十三日の基元節に行うというもので、二〇一二年一月二十三日ではありません。それを約一年早めて挙行しようとしたところに問題があったのです。

一月二十一日の訓誨会でも、真のお父様は同じような言説ことばの流れの中で、当時の韓国会長であった石俊溟氏ソクチュンを前に立たせ【写真15】、次のようなみを語って

叱責されました。

「國進、亨進が責任者ではありません。彼らも私が分からないようになせば引つかかるのです。……おまえたちが分からないと思つてしても、皆、分かっています。私の後ろには報告する人がいるのです。それが誰か。エデンの園で墮落する前に『善悪の実を取って食べたら死ぬだろう』と言った、その方です」

「真の母」を中心にカイン・アベルが一つになるという原則から見るとき、当時の國進様と亨進様（アベル）の活動に對して快く思わず、子女様と祝福家庭（カイン）の間で、不協和音ふきわだかまが起こり始めていたのも事実であり、それが問題でし

た。カイン・アベルが「真の母」を中心に一体となっていなかったのです。當時を振り返ると、幾つかの点を挙げる事ができます。

二〇一二年一月二十二日（「真の神の日」の前日）の「天福灯籠点灯式」【写真16】、一月二十四日の「統一教天福パレード」【写真17】、「天福式」【写真18】に對して違和感を表明する祝福家庭がいきました。「天福式」では、真のお父様の叱責が頂点に達し、次のようなみを語っておられます。

「父が始めねばなりません。……天地人真の父母が中心であり、今回のすべての行事は真の父母から始まるのであつ

て、おまえたちがしたらひっくり返って混乱するのです」

「先生には十四人の息子、娘がいます
が、皆、似ています。手も似ているし、
……性格も似ています。誰の言葉も聞き
ません。どれほど頑固か。聖進が代表で
あり、國進が代表であり、その次には亨
進が代表で、その息子、娘も代表です」

パレード後の「天福式」では、真のお
父様は「天福ろうそく伝授」「聖土式」
「聖塩伝授式」の式進行、および式典の
全てを再構成され、子女様を叱責しなが
ら指導されました。「郭グループ」側が
配布する前述の書籍には、「二〇一二年
一月二十四日、天福祝祭天福ろうそく・
聖塩伝授式で、創始者が行事に対して激
怒し、聖塩を韓鶴子にかけるような態度
をとり、韓鶴子は不快な表情を見せた」
(二〇一ページ)とあります。この情報
も不正確であり、真のお父様が聖塩をま
かれたのは真のお母様ではなく、亨進様
ご夫妻に対してであったのが真相です。

【写真19】

サンクチュアリ教会側の人は、二〇一二
年一月十九日の訓読会での真のお父様の
叱責および四人を立てて行った「宣布式」
から始まる一連の流れが「お母様の反逆
の始まりである」と主張します。しかし、

事の真相を知ってみれば、お父様の叱責
は真のお母様に対して向けられていたも
のではなく、子女様および祝福家庭に向
けられていた事実が分かります。

この一連の流れだけではなく、統一教
会から家庭連合の時代を迎えていたにも
かかわらず、子女様の意向で「統一教」
に回帰してしまった問題があります。真
のお父様は二〇〇〇年十月二十七日、家
庭王権時代宣布で「私たちの家庭が神様、
天地父母に仕える、主に仕える初めて
出発した家庭であるということを意識し
ながら生きなければならない……それゆ
え、この基準を中心として教会を解体し
ました」(『主要儀式と宣布式IV』五六九
ページ)と語っておられました。ところ
が解体したはずの統一教会へ回帰してし
まったのです。また聖霊治癒礼拝と題し
て四位基台を描く動作および波動を送る
歌など、元老食口は、真のお父様の信仰
の伝統が失われるのでは?との危機感
を募らせていた当時の状況がありました。

「真の母」を通じて「真の父」につな
がるという原理原則があるため、子女が
天の願いにそぐわないとき、真のお父様
は子女の代わりに「真の母」を叱責して
問題を收拾されます。そうして、聖霊の
実体であられる「真の母」が子女の不足

をとりなしてくださるのです(ローマ八・
26-28)。

真のお父様は、「お母様は、お父様よ
りももつと立派です。それで、私がお母
様に指示したことは、『あなたは、この
ような立場に立っており、あなたの内的
な面が現れたものが子供たちなので、子
供たちの教育は、あなたが責任をもちな
さい』ということです。問題が起きれば、
お父様が直接、(子女に)指摘するので
はなく、直ちにお母様に回します。その
ようにしています」(『真の御父母様の生
涯路程』五〇三-五〇四ページ)と語っ
ておられます。「直ちに」お母様に回しま
す」とあるように、問題が起こった場合、
お父様は子女様の代わりにお母様に指摘
され、問題を收拾しようとされるのです。
真のお母様の素晴らしさは、真のお父
様がお母様を身代わりに叱責されても、
それについて一言も弁明されず、お父様
に対してどこまでも従順に従っていかれ
るところなのです。

そのような真のお母様の内的姿勢につ
いて、真のお父様は次のように語ってお
られます。

『伝統的に『**ため**』に生きる愛をもつ
た**代表的な女性**を探してみると、お母様

がすべての面において一致するので選んだのです。文総裁の目は偽物ではありません。……心が美しいので、顔が美しいのです。心が美しいので、声も美しく、姿も優雅なのです」(『真の御父母様の生涯路程』⑩ 五三ページ)

「統一教会の皆さんよりも、お母様のほうが先生をもっと信じています。統一教会の皆さんが私を信じるよりも、お母様のほうがもっと私を信じているのです。あらゆる面において尊敬しているということを知らなければなりません」(同、四九一〜四九二ページ)

「お父様は、愛を征服し、復帰するために来ました。そして、それは神様に対する心情復帰でもあります。それこそ、愛の十字架でした。しかし、お母様は、このような困難を経ながらも、ただの一言も弁明しませんでした。お母様自らの苦難の意味を悟って忍耐し、ついに勝利したのです」(天一国経典『真の父母經』二〇一〜二〇二ページ)

私たちは、いかなる状況にあっても人の悪口を語られず、一言も弁明されずに、信仰と感謝で生きてこられた真のお母様の内的姿勢を相続し、似た者」とならなければなりません。

(29) アブラハム、イサク、ヤコブの論理の悪用について——再臨主に、次の代への延長摂理はない

小冊子No1の四〜六ページで取り扱った問題として、「アブラハム、イサク、ヤコブ路程を歩むのが真のお父様である。その後、ヨセフ路程を歩むのが亨進様であり、さらにエフライム路程を歩むのが信俊様であることが、神によって予定されている」というサンクチュアリ教会側の言説の誤りがありました。

この言説と類似する主張をしているのが、郭グループです。二〇一四年六月十八日、神山威氏(故人)は、郭グループが釜山で行った集会で、次のように語りました。

「基元節は、何をしなければならなかったのか。……神様の結婚式がなされなければならなかった。お父様が蘇生、長成、完成、最後の神様の結婚式を、真のお父様がどんなにその時を待ったと思えます?……基元節は一月十三日と言いましたよ。……しかし、お父様は待ちに待ったその日を迎えられず、霊界に行かれました。どんなに無念だったと思います?……アブラハムが、縦的な歴史の失敗を

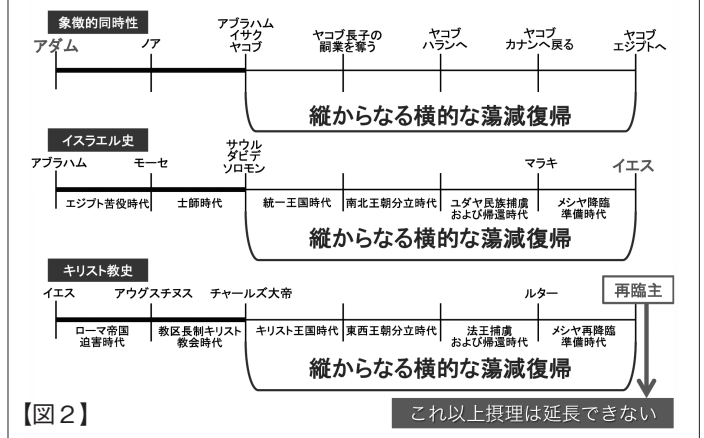
象徴献祭で蕩滅することにより、旧約時代の出発がなされなければならなかったが、それが失敗した。それを横的に蕩滅するため、アブラハム、イサク、ヤコブと横的に(摂理が)延長された。……それと同じように、真のお父様、次のお子様、そして三代まで。一代、二代、三代で神の家庭、本当の意味での基元節を迎えなければならないと、私は考えております」

神山氏は、真のお父様は使命を全うできずに聖和された結論づけ、ちょうどアブラハムの象徴献祭の失敗によって、神の復帰摂理がアブラハム、イサク、ヤコブへと延長されたように、現代でも、摂理が真のお父様、子女様、お孫様へと延長されるのだと主張します。

しかし、これは、『原理講論』が論じるアブラハム、イサク、ヤコブの「縦からなる横的な蕩滅復帰」(四四二ページ)の論理の悪用であり、誤った言説です。これらのサンクチュアリ教会側および郭グループ側の言説は、いずれも『原理講論』が論じている「原理」から逸脱した非原理的主張です。

「摂理的同時性の時代の対照表」【図2】を見れば分かるように、アダムから太い線で示されたアブラハムまでが本来の摂

摂理的同時性の時代の対照表



【図2】

理です。しかし、アブラハムが象徴献祭に失敗したため、摂理はイサクを経てヤコブへと延長されました。『原理講論』には、「もしアブラハムが『メシヤのための家庭的基台』を、**み意にかなうよう**に立て得たならば……**その基台の上でメシヤを迎える**はずであった。……（しかし）象徴献祭に失敗することにより……挫折してしまった」（二八一―二八二ページ）とあります。

これと同様、イスラエル史でも、サウ

ル王のとき「イスラエルの選民たちが、サウル王を中心とするその『信仰基台』の上で、神殿を信奉していくこの国王を絶対的に信じ従ったならば、彼らは『実体基台』を造成して『メシヤのための基台』をつくり得たはずであった」（『原理講論』四七四ページ）とあるように、その基台の上でメシヤを迎えていました。

しかし、サウル王の不信で「摂理は成し遂げられずに、アブラハムのときと同じく、これらを縦からなる横的蕩滅復帰期間として復帰するため、統一王国時代一二〇年、南北王朝分立時代四〇〇年、イスラエル民族の捕虜および帰還時代二一〇年、メシヤ降臨準備時代四〇〇年を立てて、初めてメシヤを迎えるようになった」（四五七ページ）というのです。

ゆえに、イスラエル史におけるサウル王以降の歴史は「縦からなる横的な蕩滅復帰」の歴史であり、これ以上、延長できない状況でイエス様を迎えている事実を知らなければなりません。そして、「ユダヤ人たちが……彼らの責任を果たさないならば、やむを得ずイエスは十字架で死なれて、第三のアダムとして再臨されなければならない……（ノアの鳩の摂理に）記録されている七日という期間は……**摂理的なある期間が過ぎたのちでな**

ければ、メシヤの降臨はないということを見せてくださった」（三〇八―三〇九ページ）とあるように、メシヤが勝利できないときは、摂理を直ちにやり直すことはできません。

また、イスラエル史と同様に、キリスト教史でも、『原理講論』に「**チャールズ大帝が、この基台の上で、キリストのみ言を信奉し、キリスト教理想を實現していったならば……『再臨されるメシヤのための基台』も、成就されるはずであったのである。もし、このようになったならば……その基台の上にイエスが再び来られて、メシヤ王国をつくることができ**た」（四七五―四七六ページ）とあるように、再臨主はその時来ていました。しかし、「国王が神のみ旨を信奉し得ず、『実体献祭』をするための位置を離れてしまったので、実体基台は造成されず、したがって、『再臨されるメシヤのための基台』もつくられ」（四七六ページ）ず、摂理はアブラハムのときと同様、延長されて現代に至ってしまったのです。

ゆえに、キリスト教史においても、チャールズ大帝以降の歴史は「縦からなる横的な蕩滅復帰」の歴史であり、これ以上、延長できない状況で再臨主を迎えている事実を知らなければなりません。

そして、仮に、真のお父様が勝利できなかった場合、その摂理を直ちにやり直すことはできません。すなわち、アブラハム、イサク、ヤコブの摂理のように、真のお父様、子女様、お孫様へと延長することはできないのです。にもかかわらず、サンクチュアリ教会側や郭グループ側のように摂理を「延長できる」と考えるのは、「原理」から逸脱した非原理的言説です。

『原理講論』は、「再臨主はいくら険しい苦難の道を歩まれるといっても、初臨のときのように、復帰摂理の目的を完遂できないで、亡くなられるということはない。その理由は、神が人類の真の父母を立てることによつて、創造目的を完遂なさろうとする摂理は、アダムからイエスを経て再臨主に至るまで三度を数え、……再臨のときには、必ず、その摂理が成就されるようになっていく」（四二八ページ）と論じており、再臨主の摂理においては、これ以上、延長があつてはならないのです。

このような「原理」を熟知しておられる真のお父様は、「偽りの父母から血肉を受け継ぐことによつて、亡国の環境となつてしまったサタン世界の霊界と肉界を……修理すべき責任を持った『真の父母』という人が来て、神様のように数千

年間かけて役事するのはありません。アダムが一代で完成することができなかったので、（先生）一代で解決しなければなりません。ですから、それは、どれほど途方もないことでしょうか？」（「ファミリー」二〇〇一年六月号、九ページ）、「歴史を一代で解決しなければなりません。一代ですのです。分かりますか？ 何代ではありません。先生一代で解決しなければなりません。アダム家庭が、一代で勝利できなかったことを歴史的に総蕩滅して、先生一代で整備しなければならぬのです」（同、一三ページ）と深刻に語っておられるのです。

それゆえ、真のお父様はみ旨を必ず成就しようとして不眠不休で生涯を走り抜ければ、「歴史的に総蕩滅」した勝利を打ち立てられたがゆえに、二〇一二年八月十三日、「すべて成し遂げました」（天國一國經典『天聖經』一六四五ページ）と最後の祈禱をしておられるのです。

この「すべて成し遂げました」は、ご自身の生涯と復帰歴史全体を総括する歴史的宣言であることを知らなければなりません。

にもかかわらず、真のお父様が「未完のメシヤ」であるかのように論じ、お父様をのようにさせた元凶は真のお母様

であるかのように批判することは、人類歴史上、かつてなかった最大・最悪の不信であると言わざるをえません。

サンクチュアリ教会側や郭グループ側の人々は、「真のお父様が『真の父母』としての勝利基準を立てられずに聖和された」と考えています。お父様が「すべて成し遂げました」と語っておられるように、お父様は勝利して聖和されたと応答しても、それをかたくなにはねのけ、「いや、子女様はこう語っておられる」と子女様の言葉のほうを優先して、自分たちの主張を一切曲げようとはしません。

真のお父様は、世界平和統一家庭連合時代は「長子と次子は母親の名のもとに絶対服従しなければならぬのです。服従するようになれば父と連結します」（『主要儀式と宣布式Ⅲ』一五一ページ）と命じておられます。

この真のお父様のみ言を軽んじられる子女様を擁護する彼らの心の根底には、真の父母の勝利圏を否定している子女様（郭グループは顯進様、サンクチュアリ教会は亨進様）の「不信」を正当化し、子女様の今の立場を擁護せんとする非原理的な動機が、意識しようがしまいが、あるからにはかなりません。私たちは、このような不信と「不純な動機」による非原

理的な行動を、一掃しなければなりません。

(30)「第二代王」を名乗ることは、「万王の王」に対する反逆行為

二〇一二年四月十四日、真のお父様はラスベガスの天和宮で「特別宣布式」をされ、「文鮮明、韓鶴子」という二人の人が、墮落が存在しないエデンの園にあって、『善悪の果を食べたら、死ぬであろう』と言われた、それ以前の位置に返った』と宣布されました【写真20】。

真のお父様は七日後の四月二十一日、韓国で「天地人真の父母様特別集会」を開催され、そこで次のように語られました。



写真20

『「天地人真の父母定着了」が、この本（講演文）の題名です。天地人が真の父母となつて定着する教材・教本だというの

です。……あなた方も批評をせず、『この言葉どおりに一度生きてみたい』と考える人が、福を受けて生きることができるとです。……創造主の資格をもって、最後に万王の王と父母の先祖の中の先祖となり得る勝利の覇権の栄光の宝座に座する人は、億千万代においてただ一つの夫婦であつて、二つはいません。夫婦が二つですか、一つですか。万国の王たち、偽者たちがなぜこんなに多いのですか。万王の王はお一方です。」「女性尊重時代が来ます。お母様を中心として、ひっくり返るのです。男女が同等で対等の価値の実権をつくるのです」（KMS中和新聞）二〇一二年四月二十七日号

真のお父様は、『栄光の宝座に座する人は、億千万代においてただ一つの夫婦であつて、二つはいません。……万王の王はお一方です』と語られ、天一国における「万王の王」はお一方であることを明らかにされました。しかも、それは『億千万代においてただ一つの夫婦』であると言われるのです。

サンクチュアリ教会では二〇一五年八月三十日（聖和三周年記念）、「第二代王権戴冠式」を挙行し、それ以来、彼らは亨進様を「第二代王」と呼んでいます。真のお父様が「栄光の宝座に座する人は、

億千万代においてただ一つの夫婦であつて、二つはいません。」「万王の王はお一方です」と宣言しておられたにもかかわらず、『第二代王』を名乗ることは、真のお父様に対する反逆行為にはかなりません。このような彼らのかつてな振る舞いは、彼らが真のお父様を本質的には信じていないことを明らかにしているので

(31)「お母様は肉体的墮落をした」という批判への応答

サンクチュアリ教会は、真のお父様が二〇〇九年七月十四日に語られた「オンマが墮落したので、復帰することをオンマがしなければなりません」というみ言をもつて、「真のお母様は肉体的墮落をした」と解釈します。これは、真のお母様をおとしめようとする、み言の悪用です。このみ言は、真のお父様が、「母（エバ）が墮落したので、復帰することを母（女性）がしなければなりません」という意味で語っておられるものにすぎません。

真のお父様は二〇〇九年四月十一日、『ラスベガスで今や九七パーセントまで越え、三パーセント残った峠を越えることができます』と語っておられます。そ

して二〇一〇年六月、『最終一体』を宣言されました。その前年、九七パーセントまで越えたと語っておられ、二〇一〇年六月十九日（天暦五月八日）と同年六月二十六日（天暦五月十五日）に『最終一体』を宣布されました。その途中の期間である二〇〇九年七月十四日、もし真のお母様が肉体的墮落をされたなら、それは取り返しのつかない問題であり、その時点でお母様は「真の母」の資格を失ったことを意味します。そのような事件が起こった立場のまま、二〇一〇年六月、『最終一体』を宣布され、その勝利を知らせるために世界巡回講演をされることはありません。

サンクチュアリ教会側は、エデンの園で「母（エバ）が墮落した」という意味で語られたみ言をゆがめて解釈し、真のお母様をおとしめようとしているのです。このようなみ言の悪用に惑わされてはなりません。

（32）「お母様が、お父様の生命維持装置を外して『安楽死』させようとした」という批判への応答（注：この項目では、主治医の同意を得て公表された公式見解および教会成長研究院の見解にも網掛けをしています。）

サンクチュアリ教会側は、真のお父様が聖母病院に入院しておられる時（二〇一二年八月十三日～三十一日）に、「真のお母様と幹部らが、お父様の生命維持装置を外して『安楽死させたい』と考え、安楽死をさせようとしたとき、亨進様と国進様が命懸けでそれを阻止したのだ」と述べ、真のお母様を「殺人者」であるかのように批判します。彼らは、亨進様の説教を以下のような文章にして各方面に送りつけています。

「私達は、病院で大きな戦いをしながら、お父様を安楽死させようとした時、『どうかどうか、オモニがされたら殺人者になります。メシアの殺人者になります』と言うと、たたかれ、顔をたたかれました。私を！ オモニムが私をたたかれましたのです。説得、説得、説得してから私達を呼びました。バクボヒ^マ、イジェソク、キムヨンヒ、ヤンチャンシク、ソクジュンホ、キムヒヨウル、キムヒヨナム。彼ら呼んでオモニムは一人一人皆に聞きました。『私がアボニムを解放したい』と、『生命維持装置』外したい』と、『唇の色が変わっている』と、朴晋照^マだけ反対しました。……ところが、他のこ

の偽り者達が、詐欺屋達がグーの音も言わず、自分のメシアが寝台に横たわっておられた時、全世界に『食口達に精誠を捧げよ、断食せよ、祈禱せよ』と私（亨進様）が全世界にそのメモ公文を送った時、皆が精誠をし、祈禱をし、何、禁食をしている時、一人も言わない。だからオモニムが最後に私を見て、また国進様を見て話しなさいと言うから、私たちははつきりと言ったのです。そうされたら殺人者になります。五十年して来られた全ての内容を、歴史はオモニムを殺人者として見ます」

真のお父様の主治医の同意を得て「トゥデイズ・ワールド ジャパン」二〇一二年陽曆十月号に公表された石俊溟^{ソクチュ}韓国会長（当時）の「真のお父様の摂理的闘病路程」の報告（以下、「石氏の報告」）では、ご入院から十六日目の八月二十八日、聖母病院とソウル大学校病院の呼吸器系統の韓国最高の医師から「真のお父様の肺機能回復率がほとんど皆無である」（74ページ）と通達され、その日の午後、金榮輝^{キムヨンフイ}氏、朴普熙^{パクボヒ}氏、李載錫^{リュサグ}氏、石俊溟氏らが集まり会議を行ったとあります。

①教会成長研究院の二〇一六年二月二十八日の映像での反論について

教会成長研究院は、病室に居合わせた看護師、病室を訪ねた幹部らの証言、そして亨進様をはじめサンクチュアリ教会側の主張を総合し、二〇一六年二月二十八日の映像「真のお母様の生涯とサンクチュアリ教会問題」で次のように反論しました。

「(八月十三日) 聖母病院に移送されたとき、医者から『到着が三十分遅れていれば難しかった』と言われました。肺機能は低下し、腎臓機能は停止、すでに回復は不可能であると診断されました。……お母様はお父様の苦痛を察し、そのようなお姿で延命されることを願われるお父様なのだろうか」と苦悩され、生命維持装置を取ることも考えられました。

しかし、亨進様、國進様にとつては、そのような姿が誤解する決定的な事件になってしまったのです。亨進様は(二〇一五年九月十三日の説教で) 次のように語られました。

『お母様は五十年間この謎を隠していました。私たちはお母様が痛みや恨みを持っていることを知っていました。しかし、お母様がお父様に対してこのように

復讐心を持っていたとは知りませんでした』

このように語っていますが、夫を苦痛から解放してさしあげたいと願うことが『復讐』となるのでしょうか？ この亨進様の批判は、真の父母様が育まれた夫婦愛、妻の持つ『烈』の心情世界が分らずに完全に誤解している状況ではないでしょうか。

真のお母様は、『清平で三日以上過ご

して霊界に行かれなければ』と語られ、救急車を改造され、清平に聖母病院と同じ設備を準備して移され、八月三十一日午後七時に真のお父様が到着されました。そのとき、お父様が目でお母様を捜され、お母様は『お父様、家に帰ってきましたよ。家に帰ったのでいいでしょう？』と語られました。するとお父様が涙を流されました。まなざしと手で、ふたりだけで深い対話の時間が持たれました。九月二日、真の家庭が集まり、お父様の好きな歌を歌い、手足をもまれました。夕方から血圧、脈拍数が落ちていき……四日目の九月三日午前一時五十分、お母様と共に『サランヘ・アボニム』を歌い、見送る中で聖和されました。それから、すぐお母様は医療装置を外すように指示されました」(真のお母様の生

涯とサンクチュアリ教会問題」の映像から)

上述の「お母様はお父様の苦痛を察し、そのようなお姿で延命されることを願われるお父様なのだろうか」と苦悩され、生命維持装置を取ることも考えられました」という部分は、亨進様の説教情報を正しいものと仮定したうえで述べたものでした。

しかし、正確な情報は主治医の情報です。

②治療を行った日本人医師の証言、および「真のお父様の摂理的闘病路程」の報告に基づく応答

聖母病院の主治医以外に、真のお父様の治療を担当した日本人医師にW医師とA医師、T医師の三人がいます。W医師にインタビューし、正確な情報を確認しました。

W医師の証言を簡潔に述べると、以下のようになります。

「八月十六日、清心病院の医師から電話で『DIC(播種性血管内凝固症候群)に対し日本から援助できる治療法はないか』と問い合わせがあり、日本にしかないリコモジュリンという薬の投与が効く

と伝え、それをすぐ準備し清平に届けたが、聖母病院の医師からは『その対象ではない』とのことで、投与は見送られた。その後、清心病院の医師から二十五日と二十七日に電話があり、『お母様が、日本から呼吸器科と腎臓、透析の専門家を連れてきてほしい。今の仕事を置いて、半年から一年来てほしいと言っておられる』との連絡であった。半年から一年、韓国に行くのは大変なことであるが、短期でも行ってお母様の願いにお応えしようと、W医師とA医師は二十九日、T医師は三十日に訪韓した。

W医師は二十九日朝、韓国に到着。聖母病院の主治医に会って病状を聞くと『もう長くない状態です』と説明を受けた。お父様は手足を動かし、時々目を開けておられた。しかし、W医師が瞳孔に光を当てると、対光反射は認められ、痛み刺激に顔をしかめるような反応はあったが、昏睡で意識がない状態であられた（CSⅢⅡの状態、CSⅢⅡ：ジャパン・コーマ・スケール）。医師でない、看護師や病室を訪ねた関係者を見ると、**回復を強く願う思いも手伝わ**てか、**お父様はまだ意識があり、回復するかもしれないと思えたかもしれない**。しかし専門の立場から見れば、すでに昏睡で意識がない状態で、極めて重篤であられた

この証言は、「トゥデイズ・ワールドジャパン」掲載の「石氏の報告」と一致します。前述したように、「石氏の報告」には、八月二十八日に韓国最高の医師から「真のお父様の肺機能回復率がほとんど皆無」と通達されたとありますが、W医師が「対光反射」を見ると意識がなく、それは「ほとんど皆無」という通達を裏づけるものでした。

W医師が真のお父様のお体を確認すると、生命維持装置で血圧、脈数は安定しておられたが、手足の末端は血行障害を起こし、血の気がない状態であられたといえます。

この情報は、「石氏の報告」と一致します。その報告は次のようになっていきます。

【八月三日、聖母病院に入院され……肺炎であるという診断を受け……病状は非常に深刻で、敗血症、肺不全により肺に水がたまっていることが判明しました。

『絶対安静』が必要だという医師からの注意がありました。しかし真のお父様は、**天正宮博物館に必ず行かなければならないと強く命じられ、八月十二日に還宮されました。**

還宮後には天正宮博物館のあちらこち

らを見回し、手を触れながら別れの挨拶をしていらつしやるかのようなお姿でした。真のお母様に**侍り、最後の祈禱のよ**うな深刻な祈禱もなさいました。『すべて成した！』というみ言を一日の間に四回も語られながら、周囲を整理されるお姿もありました。……翌十三日には……清平団地を見回る』と言われ、清心国際中等学校の前まで行ってきたりもされました。しかし午後になると、真のお父様の体力は急激に衰え……お母様は、涙で真のお父様に『病院にまいりましょう』と訴えられました。普段であれば一言で断る真のお父様でしたが、この日は喜んで真のお母様の忠告を受け入れ……清心国際病院へ行かれました。清心国際病院で数時間、療養をしていらつしやる間にも真のお父様のご容態はさらに悪くなり……お母様は、直ちに真のお父様のお許しを頂き、再び総合病院であるソウル聖母病院まで真のお父様をお送りするよう命じられました。……

聖母病院二〇七号室に入室された真のお父様は、直ちに応急措置を受けられました。夜中でしたが、あちこちから緊急の呼び出しを受けて駆けつけた医師だけでなく五、六人、看護師七、八人……その晩十二時が過ぎた頃になって、真のお父

様は五階の集中治療室へ移されました。……深夜一時を過ぎてからやつと集中治療室から出てきたチョン博士は、『……あと三十分遅かったら、きょうは大変なことになるところでした』と、真のお母様の知恵深く、素早いご決断に驚いていました。……私たちは、ソウル聖母病院のほかにソウル大学病院の門をたいてみたりもしました。ところが……韓国最高の医師たちの結論は……お父様の肺機能回復率がほとんど皆無であるという、呆然とする現実……八月二十八日のことでした。一人お部屋に入られて、限りなく慟哭される真のお母様……午後、私たちは会議を持ちました。参席者は金榮輝、朴普熙、李載錫、石俊溟、訓母様、金孝律、そして真のご家庭の代表として文國進様と文亨進様。この八人で真のお母様に待り深刻な会議をしました。……どのようにすれば真のお父様に少しでも地上で長く侍ることができ、少しでも楽にしてさしあげて（霊界に）行かせるようにできるかを深刻に考え議論しました。……『どんなことがあっても、真のお父様のお体を保護しなければなりません』という（お母様の）み言でした」

八月二十八日の通達があった翌日、W

医師は聖母病院に到着します。W医師は、真のお母様の「三日以上、清平で過ごさなければならぬ。聖和させてはならない」との願いを受け、主治医が「もう長くない状態」と診断し、意識のない重篤状態で、お母様の願いが可能かどうか深刻になったと証言しています。

教会成長研究院が、前述した映像で「八月三十一日午後七時にお父様が（清平に）到着されました。そのとき、お父様が目でお母様を捜され、お母様は『お父様、家に帰ってきましたよ。家に帰ったのでいいでしょう？』と語られました。するとお父様が涙を流されました」と説明したのは、「お父様が目でお母様を捜され……するとお父様が涙を流された」と証言する人がいたためです。おそらく、それは回復を強く願う思いも手伝い、真のお父様の意識が回復されたと思ひ込んだのであり、W医師によれば、意識のない状況でそれはありえないと証言しています。それくらい、実際のお父様のご容態は厳しいものでした。

W医師によると、当時、真のお母様を含め誰もがいかにお父様に地上に長くいていただくかを考えた時期であり、聖母病院で「生命維持装置」を外す論議が出るような状況ではなかったとのことで

す。もし装置を外したら、真のお父様は聖母病院で聖和されることになり、「聖和式」の挙行も難しい状況が生じた可能性があったからです。お母様の願いは「何としても生かしてほしい」というものでした。「石氏の報告」と日本人医師の証言は一致しており、これが「真実」と言えます。したがって、真のお母様が、真のお父様のご聖和前に医療装置を外すよう指示された事実はありません。

ところで、サンクチュアリ教会側の人の中には、「信頼できる筋からの情報では八月十五日頃には韓鶴子総裁の命令で聖和式の準備が密かに始められていた」などと語って、いろいろ批判する人もいます。

しかし、前述したとおり、日本のW医師の証言によると、「八月十六日、清心病院の医師から電話で『DIC（播種性血管内凝固症候群）に対し、日本から援助できる治療法はないか』と問い合わせがあり、日本にしかないリコモジュリンという薬の投与が効くと伝え、それをすぐ準備し」て韓国に届けたり、さらに、真のお母様が八月二十五日と二十七日に清心病院の医師を通じて、「日本から呼吸器科と腎臓、透析の専門家を連れてきてほしい。今の仕事を置いて、半年から

一年、(真のお父様の治療のため)来てほしい」との連絡をされ、専門医を日本から呼び寄せようとしておられます。事実、そのお母様の願いにお応えしようと、三人の医師がすぐに訪韓しているのです。この一点を見ても、真のお母様が、真のお父様のご容態を誰よりも心配なさっていたことは明らかであり、万全の態勢をもって取り組もうとしておられたことは間違いないことです。お父様が一日でも長く地上におられることを願われ、そのために最後までお母様は懸命にお父様に侍り、守られました。

亨進様が語っておられる「お父様を安楽死させようとした」「私たちは……お母様がお父様に対してこのように復讐心を持っていたとは知りませんでした」という発言は、真のお母様に対する反発心から、真のお父様と「最終一体」になっておられるお母様をおとしめ、誤った情報で教会員を「真の父母」から離反させようとする「情報操作」のための発言です。私たちは、このような意図的で不正確な情報に惑わされてはなりません。

私たちは、真のお父様が生前に語っておられた「先生が霊界に行ったならば、お母様を絶対中心として、絶対的に一つにならなければなりません」とのみ言に

従って、天の父母様(神様)とお父様の「夢」を実現させようと最前線に立つて奮闘しておられる真のお母様と一体化し、お母様をお支える歩みをしていかなければなりません。それが、お父様の最大の願いでもあるからです。

(33) 天二国の永遠の中心は、天の父母様と真の父母様である——「真の父」と共に「真の母」を重んじなければならない

①モーセ路程における「二つの石板」は、「真の父」と「真の母」を表す

真のお父様は、「真の父母」について次のように語っておられます。

「神様が、今まで歴史的に願ってきた摂理の目的とは何でしょうか。真の父母の基準です。人類が墮落した以後、今まで蕩滅歴史をしてきたのは、何をするためでしょうか。真の父母を探すためです。数多くのキリスト教徒たちが、今まで再臨の日を待ち焦がれてきたのもこのためであり、数多くの宗教が、すべてこの一日を願っているのもこのためです」(八大教材・教本『天聖經』一八三ページ)

「本来、神様の創造理想は何かというと、真の父母の名を通じて天国の王国と

地上の王国を完成することです。これを知らなければなりません。真の父母の名をもたずには、地上天国と天上天国は生じません。……天上天国と地上天国は、真の父母の完成と愛の基盤を通してのみ成し遂げることができるものです。霊界に行って王国を統一するということは真の父母の使命であって、ほかの人の使命ではありません。イエス様は真の父母になることができなかったので、楽園に行っているのです」(同、一七三九ページ)

「すべての出発は、真の父母からです。あらゆるものの出発、最初は、皆さんではなく真の父母です。生きるのも、行動するのも、愛の家庭を連結するのも同様です。最初は真の父母です。これは先生の話ではなく、私たちの最初の先祖に対する神様の公式的な概念です」(同)

このみ言にあるように、神様の摂理の目的は「真の父母を探すため」であり、真の父母によつてのみ「天上天国と地上天国は……成し遂げることができる」というのです。それゆえ、復帰摂理に現れる象徴的、形象的な内容には、様々な意味で「真の父母」が表示されていることを知らなければなりません。

例えば、モーセ路程における「雲の

柱」「火の柱」「二つの石板」は、真の父母を象徴しています（『原理講論』三六九、三七二ページ）。真のお父様は、二つの石板について「イスラエル民族が……滅亡するのを心配されて、神様がモーセをシナイ山に呼ばれ、四十日間モーセに断食をさせて二つの石板を与えられました。それが何であったのかといえば、アダムとエバ、『真の父母』を象徴していたということを知らなければなりません」（『ファミリー』一九九八年四月号、一七ページ）と語っておられます。

二つの石板は宇宙を象徴する「契約の箱」に入れられており、それは宇宙の中心を意味するものです。分派活動を行う人の場合、彼らは「真の父」のみを重んじ、「真の母」を軽んじる傾向性をもっています。「契約の箱」に石板が二枚あるように、私たちは「真の父」と「真の母」の両方を重んじなければなりません。

前述した^{ことば}みに、「イエス様は真の父母になることができなかったので、樂園に行っているのです」とあるように、イエス様は地上で実体の「真の母」を立てることができなかったため、地上・天上天国を完成させることができませんでした。

創造理想の基準において、神様は「人（アダム）がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」（創世記二・18）と言われ、第二のアダムであるイエス様の場合も、「父は別に助け主（聖霊）を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さる」（ヨハネ一四・16）と語られました。

再臨摂理においても、「真の父」と共に「真の母」が現れてこそ、初めて人類の「真の父母」となり、神様の創造理想を成し遂げることができるのです。

ところで、サンクチュアリ教会側では、血統について語るとき「皇太后（注：真の母）は王にはなりません。なぜなら彼女は女性であり、血統を持たないからです」と述べ、女性は血統を持たないと主張します。これは非原理的な言説です。真のお父様は、女性も血統をもっていることを、次のように語っておられます。

『だれであっても、母親の子宮にくっついて母親の血肉を吸い取って大きくなったでしょう。……母親の血肉が必要であり、母親の骨肉が必要であり、**母親の愛が必要であり、生命が必要なのです。**分かりますか？ 自分のゆえにではなく、**母親の愛のゆえに、母親の生命のゆえに、**

母親の血統のゆえに、私が生まれたということは否定できません。生まれるときには、女性として、あるいは男性として生まれるのですが……女性は何のために生まれたのですか？ 男性のためにです。一時代ですか、永遠の時代ですか？ 永遠の時代です。神様の娘の愛は、絶対、唯一、不変、永遠の愛であるので、その愛を中心として、その対象的価値は絶対価値であり、絶対的な相対であるということを知らなければなりません。……それゆえに、**女性の前に男性は、絶対真理の愛の相対なのです**」（『ファミリー』一九九九年十一月号、三〇ページ、「九・九節」のみ言）

真のお父様は、「母親の血統のゆえに**私**が生まれた」と語っておられます。女性も血統をもっていることを知らなければなりません。サンクチュアリ教会側が語る血統の言説は、血統に対する「正確な理解」に基づいてなされているものです。

真のお母様を批判する人々の多くは、男性だけが血統を持っていると考える傾向をもっています。「血統」の概念を正しく知らなければなりません。

すでに小冊子Ⅲの二、（2）で論じたように、真のお父様は、男性と女性の両

性の「生命」が関わって血統が生じることにについて、次のように語っておられます。

「生命を見ましたか？ 生命に触ってみましたか？ 生命体は見えるけど、生命は分かりません。触ってみることはできません。血統もそうです。血統は夫婦が愛するその密室、奥の部屋で結ばれるのです。そして、精子と卵子が出合って生命体として結合するとき、血統が連結されるのです」（「ファミリー」一九九五年三月号、二二ページ）

「二人で血統が連結されますか？ この血統は、男性の血だけでは連結できません。男性と女性が一つにならなければなりません」（「ファミリー」二〇〇一年三月号、二二ページ）

「皆さんが父母から受け継いだ命は、父の精子と母の卵子を受け継いだところから出発したのです。その卵子と精子が一つとなったところに、愛によって根が生まれて発生したのが、皆さんの子女です」（「ファミリー」二〇〇七年三月号、七ページ）

真のお父様は、父、母から子女への生命の連結、すなわち「血統」に対して、そ

れは愛を中心として精子と卵子が一つとなることから出発したと、生理学的に述べておられます。ただし、精子と卵子の生理学的次元の指摘だけでなく、さらに深く考察され、「愛によって根が生まれ発生した」と「愛」を強調しておられます。

また、真のお父様は、平和メッセージで「生命と愛が合わさって創造されるものが血統です」（「平和神経」二八ページ）、「血統は、父母が子女だけに与え得る特権中の特権です」（同、三九ページ）と語っておられますが、血統は男女による両性の「生命」を抜きにして生じることはありません。すなわち「生命がなくても、愛がなくとも血統は創造されません。愛、生命、血統のうち、その実りが血統なのです」（同、二八ページ）とあるとおりです。

血統とは、男性と女性の両性によって「精子と卵子が出合って生命体として結合するとき、血統が連結される」のであって、その「親子関係（父子関係）」による縦的なものであることを理解しなければなりません。

②天国（天^{てん}一^{いち}国）は、真の父母を中心に人類が一つになって実現される

カナンの地に入れなかったモーセ路程

を蕩滅^{とうげん}し、カナン復帰を成し遂げたヨシユアの路程について、『原理講論』はそれが「再臨路程」を表示するものとして、次のように論じます。

「モーセの使命を代理してでたヨシユアは、初臨のときの使命を継承して完成するために再臨なさるイエスを象徴したのである。したがって、モーセ路程を蕩滅復帰するヨシユアの路程は、イエスの霊的復帰の路程を蕩滅復帰しなければならぬ、彼の再臨路程に対する表示的路程となるのである」（三九四ページ）

カナン復帰を成し遂げたヨシユアの路程は再臨路程を表示します。そして、このヨシユアの路程について、『原理講論』は次のように論じています。

「彼らが十二の石を取って、カナンの地の落ち着いた宿営地に、ひとところに集めて置いたとき、ヨシユアは『このようにされたのは、地のすべての民に、主の手に力のあることを知らせ、あなたがたの神、主をつねに恐れさせるためである』（ヨシユア四・24）」と言った。これは、将来石として来られるイエスに仕える十二人の弟子たちが、一つの心で一つ

の目的に向かい、一つの所で**一致団結してこそ、世界的カナン復帰を完成して**、神の全能性を永遠にたたえることができるということをし、**予示してくださったのであった**」(三九六ページ)

神様が**「再臨路程」**を予示するヨシユアの路程で見せてくださったように、再臨主である**「真の父母」**を中心に、子女たち(アベルとカイン)が一致団結してこそ、世界的カナン復帰路程を完成させ、永遠なる**「天一国」**が実現されるのです。天国(天一国)の中心は、神様と一体となられた**「真の父母」**であり、子女ではありません。神様がヨシユアの路程で予示されたように、真の父母様を中心に**「一致団結」**すべきであるという点を、明確にしなければなりません。

真のお父様は、二〇一〇年七月十六日のいわゆる**「ボート会議」**で、**「顯進は先生と同じ方向に向いていない。逃げ回っている。顯進が先生の方向に來なければならぬんだよ」**「顯進が先生の方

(顯進様、國進様、亨進様)が違った方向の考えを持っているが、共に行く方向でやらなければ大変だ」と語られました。今日起こっている**「不協和音」**の問題は、**「真の父母」**を中心に、子女たちが一致団結していないために起こっている問題であると**「言わざるを得ません」**。

郭グループ側に立つ人は**「顯進様こそが長男であり、後継者である」**と語り、サンクチュアリ教会側に立つ人は**「亨進様こそが正統な後継者である」**と語って、互いに相手を牽制するかのよう主張し合っています。しかしすでに論じたように、**「真の父母に「後継者」は存在しません。人類の「真の父母」は永遠に一組であり、それは「文鮮明・韓鶴子ご夫妻」です。**

また、天一国の**「万王の王」**も一組の夫婦しかおられず、それは神様と一体となられた天地人真の父母様(文鮮明・韓鶴子ご夫妻)です。子女様の立場は**「後継者」**ではなく、どこまでの信仰の**「相続者」**であり、真の父母の**「代身者」**にすぎません。そしてたとえ子女様であっても、その正統な**「相続者」**、**「代身者」**となるためには、真の父母様との完全一体が成されなければならないのです。

真のお父様は、天国の門は**「真の父母」**であるとして、次のように語っておられ

ます。

「地獄が二つあります。地上地獄、天上地獄がありますが、**天国の門は一つです**。地獄の門が開くからといって、地上から天国に直接入っていくのではありません。**真の父母を通して入っていくのです。真の父母を通して入っていく門が、一つの天国の門です**」(八大教材・教本『天聖經』二二〇一ページ)

「人類が偽りの父母として出発したので、**天国の門を開いて入るには、真の父母が出てこなければなりません**。神様も、自ら天国の門を開くことができません。神様が自ら天国の門を開くことができるなら、そのような能力がある方が、なぜしないでしょうか。墮落は、人間がしたために、罪を犯した人間が罰を受けなければなりません。**人間が天国を失ってしまったから、人間が取り戻さなければならないのです**。それで六千年もかかったのです」(同、六七八ページ)

天国の門は一つなのであり、それは**「真の父母」**です。前述した名言に**「すべての出発は、真の父母からです。あらゆるものの出発、最初は、皆さんではなく真の父母です。生きるのも、行動するのも、**

愛の家庭を連結するのも同様です。最初
は「真の父母です」とあるように、私たち
は全ての始まりの基準を「真の父母」に
置くべきです。

ある人は、子女様の願いを受けて、「自
分こそが父母様と子女様の間をとり持つ
のだ」と主張しています。しかし、その
ような言動は、出発点、軸を子女様に置
いているのであって、「真の父母」に置
いてはいません。ゆえに、その言動は「天
の願い」からずれていることを理解しな
ければならないでしょう。

かつて、真のお父様は顯進様に従う人
たちを「郭グループ」と表現され、「従
う人たちの話を聞いて、子女が親の下に
来ない」と語られ、怒りを露わにされま
した。

真のお母様も、サンクチュアリ教会問
題が起こったときに、「万が一にも、あ
れこれ言いながら『少し助けてあげよ
う』と（誰かが）言っても、それに対し
て揺らいではいけません。（子女様を）
助けてあげないことが助けてあげること
です」（トウデイズ・ワールド ジャパ
ン）二〇一五年陽曆九月十日号、四ペー
ジ」と語られました。「真の父母」と一
体となっておられない子女様に従う人た
ちは、結果的に真の父母様の息子を奪っ

た張本人となり、真の父母様と子女様の
間を裂く者となってしまうているのです。

その事実を、私たちは客観的、かつ冷
静になって見つめ直し、『原理講論』の
ヨシユアの路程で論じられているよう
に、「将来石として来られるイエスに仕
える十二人の弟子たちが、一つの心で一
つの目的に向かい、一つの所で一致団結
してこそ、世界的カナン復帰を完成して、
神の全能性を永遠にたたえることができ
る」ということを、予示してくださった」
という「天国実現の道」を見つめつつ、
み旨に邁進しなければなりません。

③ 真のお父様との地上での最後の生活

私たちが人生を終えようとする時、最
愛の人と共に過ごしたいと願うもので
す。真のお母様は「真のお父様との地上
での最後の生活」と題して、次のように
語られました。

「真のお父様は生涯ご自身を顧みられ
ず、神様の解放と人類救援のためにお体
を燃焼なさいました。そのようにして、
誰も想像することができないほど多くの
業績を残され、真の父母様だけがなすこ
とのできる権能を行使して、神様を解放
してさしあげられ、神様が直接、この地

上と霊界をお治めになることができる門
を大きく開かれました。

そして、歳月の流れとともにより強く
なる思いをもって一心に、ひたすらため
に生きる人生を、お体を顧みることなく
一分一秒を惜しまれながら、いつも時間
がなく不足であるという心情で、生きて
おられました。そのように過ごされるの
で、決まった時間にお食事を取ることも
できずに、（食事を）抜かれる日も多く、
肉身が必要とする休息というものはお考
えになることもできませんでした。真の
お父様は元来とても健康なお体でお生ま
れになったため、健康管理だけしつかり
なさるならば、もつと長く生きることが
できたでしょうが、最近の数年間には『一
日が千年のごとく感じる』と語られなが
ら、大変急がれました。……

今年（二〇一二年）の八月の初め、病
院で十日間にわたり全ての検査を終え
られ……退院されて天正宮博物館にい
らっしゃった一日の間、真のお父様は周
囲の補佐官らに『きょうは、オンマと向
かい合って食事をしたい』とおっしゃい
ました。いつも私は真のお父様の横に
座って一緒に食事をするのですが、そ
の日は『向き合ってオンマの顔を見
ながら食事がしたい』と言われるので、

そのように食事の席を準備してさしあげました。そのようにしたところ、真のお父様はお食事を召し上がらずに、私の顔だけをじつと見詰めていらつしやったのです。恐らく真のお父様のお心の中に私の顔を刻みつけておられたのでしょう。私は心の中では涙があふれ出てきましたが、笑みを浮かべつつ、『これも、あれもおいしいですよ。召し上がってください』とお勧めいたしました。そのような時間があつたので、私はさらに深刻になりました。……

時々み言の中で『私が霊界に行く時になつた。私は行く時を知っている』などといった内容を数多く語られたのですが、そのような準備をされた最後の期間であつたことは間違いありませんでした。これは真のお父様が逝かれる前の一つの逸話ですが、実際にはそれよりも多くの事情を真のお父様と共にした日々でした。お食事をされるときも、私と並んでお座りになつて召し上がっていました。私を意識されて、片方の手で私の手をしっかりと握つて召し上がっていました。……『少し休んでください』とお勧めすると『オンマの膝で横になりたい』と言われながら、うたた寝をされたりもしました。健康でいらつしやつたとき

には全くなさならなかつたそのような行動を……幼い子供がお母さんを必要として頼ってくるように、いつも私のそばに一緒にいたがられたのです。

……私は（お父様が聖和された）今、毎日真のお父様と対話をしながら過ごしています。真のお父様が平素より好まれた味噌チゲやおかずなどを、あれこれ説明してさしあげながら、おいしく召し上がつていただけるようにお勧めして、食膳を上げています。……（侍臺精誠の）この期間だけでも私が精誠を尽くして侍らなければなりません。

皆さん。真のお父様が聖和されたその瞬間、私は真のお父様が人類のために願われ、志された内容を、私の命が尽きるその日までに成就してさしあげると約束したではありませんか。そのため今、私（お母様）は忙しいのです」（トウデイズ・ワールドジャパン）二〇二二年一月号、一四（一八ページ）

真のお父様は、地上での生涯路程を終えようとされるとき、最愛の人であるられる真のお母様と共に過ごしたいと願われ、お母様はその願いをかなえてさしあげられました。そして真のお母様はお父様の生涯の願いである天一国実現を果

たそうと今「中断なき前進」をしておられます。

私たちは「最終一体」となられた真の父母様を絶対中心として、ビジョン二〇二〇（お父様の聖誕百年祭）を胜利的に迎えられるよう、一致団結して精誠を尽くして走り抜いていかなければなりません。私たちがそのような姿勢で歩んでこそ、今独自の道を歩まれる子女様の問題も、世界の様々な問題も、真の父母様を中心に収拾されてゆくのです。